

谷田遺跡

長野県上伊那郡中川村大草美里

緊急発掘調査報告書



1987

中川村教育委員会

谷田遺跡

長野県上伊那郡中川村大草美里

緊急発掘調査報告書

中川村教育委員会

序

この報告書は、谷田地区団体営土地改良総合整備事業に伴い、昭和62年度に実施された谷田遺跡の緊急発掘調査の報告書であります。

谷田遺跡は、天竜川左岸村の中心部より約3.5km距てた南西に傾斜した水田の中にあり、農地造成による破壊の跡がみられる遺跡であります。対岸西地区においては、昭和53年度以降はとんど毎年のように基盤整備による発掘が進められ、地区における古代からの歴史の道を辿ることができた訳でありますが、東地区は本格的な調査が行われておらず、今回の調査に期待が寄せられていました。

調査の結果は章を追って詳細に記されていますが主なものとして、縄文時代中期の住居址や同後期住居址及び敷石造構が発見されました。当地方での後期のものが少ないなかで、中川村にあっては、他市町村に比べてこれだけ後期の遺跡の存在することは特記すべきことだと思います。弥生時代後期の土器もあり集落の存在したことでも確かめられています。また破損品の捨場と見られる所からは縄文時代中期から平安時代に至る間この地に生活した跡を伺うことができたのも今回の収穫であります。なお今回の調査を機会にこの地域の地名や同じような地形にある付近の集落との関連について調査できたことも意義があると思います。

今回の調査に当たり、関係地主はじめ地元の方々のご協力を戴き、調査団の先生方や関係者の並みならぬご努力により、ここに計画通り報告書が刊行できますことを深く感謝申し上げる次第であります。

昭和63年2月

中川村教育長 北沢正美

例　　言

1. 本書は昭和62年度に実施した、大草谷田地区団体営土地改良総合整備事業に伴う、埋蔵文化財の緊急発掘調査に基づく報告書である。
2. 本事業は中川村の委託により、中川村遺跡調査会が実施した。
3. 本報告書は契約期間内（昭和62年度）中にまとめることが要求されているため、調査によって検出された遺構及び遺物をより多く図示することに重点をおいたので文章記述はできるだけ簡略化につとめた。
4. 各遺構の図面の縮尺は1/60を基準とし、遺物の縮尺は1/3としたが、一部そうでないものもあり縮尺は各図に示してある。
5. 本報告書の執筆者及び図版製作者は次のとおりである。

○ 本文執筆者　友野　良一・木下平八郎・小木曾　清・石原　守・松下　節子

○ 遺構図　小木曾　清・松下　節子

○ 遺物の実測・拓影　木下平八郎・小木曾　清・橋沢　定子・白鳥まち子・松下　節子

○ 土器の復元　木下平八郎・小木曾　清

○ 写真の撮影・図版　木下平八郎・友野　良一

6. 本報告書の編集は教育委員会が行った。

7. 遺物及び実測図類は中川村歴史民俗資料館に保管してある。

目 次

序

例 言

第Ⅰ章 発掘調査の経緯

第1節 発掘調査に至るまでの経過	1
第2節 調査会の組織	1
第3節 発掘調査の経過	2

第Ⅱ章 遺跡の環境

第1節 遺跡の位置	5
第2節 地形及び地質	5

第Ⅲ章 遺構と遺物

第1節 調査の概要	7
第2節 遺構と遺物	7
概要	7
第1号住居址	8
第2号住居址	8
第3号住居址	14
第4号住居址	17
敷石遺構	21
第1号土坑	22
第2号土坑	22
第3号土坑	23
土器捨て場	23
遺構外遺物	28

第Ⅳ章 美里の歴史的歩み

29

所見	40
----------	----

文献目録	42
------------	----

図版	43
----------	----

挿 図 目 次

第1図 谷田遺跡の位置図	4	第20図 第1号土坑遺構及び埋甕実測図	22
第2図 上伊那南部竜東地方の地質図	5	第21図 第2号土坑遺構及び埋甕実測図	22
第3図 谷田遺跡の地形及び発掘図	5	第22図 第3号土坑遺構及び土器実測図	23
第4図 遺構配置図	6	第23図 土器捨て場地層図	23
第5図 第1号住居址実測図	8	第24図 土器捨て場出土土器実測図	25
第6図 第1号住居址出土土器拓影 及び石器実測図	9	第25図 土器捨て場出土土器拓影	26
第7図 第2号住居址実測図	10	第26図 土器捨て場出土土器拓影 及び石器実測図	27
第8図 第2号住居址床面出土土器拓影	11	第27図 遺構外出土土器拓影	
第9図 第2号住居址出土土器拓影	12	及び石器実測図	28
第10図 第2号住居址出土土器拓影 及び石器実測図	13	第28図 西丸尾地区出土石器	29
第11図 第3号住居址実測図	14	第29図 西丸尾地区遠景	30
第12図 第3号住居址出土土器拓影	15	第30図 丸尾地区遠景	30
第13図 第3号住居址出土土器拓影 及び石器実測図	16	第31図 谷田地区遠景	31
第14図 第4号住居址実測図	17	第32図 田ノ頭地籍	32
第15図 第4号住居址及びその他の Pit一覧表	18	第33図 黒牛地区遠景	33
第16図 第4号住居址出土土器拓影	19	第34図 天正19年 檢地帳	34
第17図 第4号住居址出土石器実測図	20	第35図 十王像	34
第18図 敷石遺構実測図	21	第36図 風三郎神社奥宮	35
第19図 敷石遺構出土土器拓影及び石器実測図	21	第37図 明治時代の小字名	36
		第38図 天正19年の検地帳の地名	37
		第39図 美里地区小字図（その1）	38
		第40図 美里地区小字図（その2）	39

図 版 目 次

図版1 谷田遺跡遠景	44	図版8 第1号土坑・第2号土坑	51
図版2 第1号住居址・出土土器・炉址	45	図版9 第3号土坑・遺構外出土土器	52
図版3 第2号住居址・炉址・P3 石斧出土状態	46	図版10 土器捨て場状況・出土土器	53
図版4 第2号住居址・埋甕出土状態	47	図版11 土器捨て場出土土器・出土状況	54
図版5 第3号住居址・敷石遺構	48	図版12 繩文後期土器・ 埋甕・土偶	
図版6 第4号住居址・出土後期土器	49	谷田地区出土遺物	55
図版7 第4号住居址出土土器・石器	50	図版13 中川村出土繩文後期土器	56
		図版14 鍵入式・現場説明会	57

第Ⅰ章 発掘調査の経緯

第1節 発掘調査に至るまでの経過

土地改良総合整備事業地区内の遺跡調査は、長野県教育委員会より村教育委員会に対し、改良整備地区内に埋蔵文化財包蔵個所があるので、事前に調査するよう昭和61年10月16日付けで連絡があった。おって中川村より緊急発掘調査について委託したい旨、村教育委員会への依頼があって、両者と協議の結果、村教育委員会の編成した中川村遺跡調査会が中心となり、谷田遺跡発掘調査団をこの中に含めて発掘業務を遂行することになった。

昭和62年4月20日中川村長と中川村遺跡調査会長との間で「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約」を締結し5月19日村遺跡調査会を開催し谷田遺跡発掘計画について協議し、そのあと現地において鍛入式を挙行し、翌5月20日から調査団により調査を開始した。

第2節 調査会の組織

○中川村遺跡調査会

会長	北沢 正美(村教育長)
理事	杉沢 要(村教育委員長)
"	斎藤 英雄(")
"	米山 俊博(村教育委員)
"	中塙 道雄(")
"	米沢 広明(")
"	荒井 健(村文化財調査委員)
"	平沢 善吉(")
"	河崎 宣雄(")
"	下平 元護(")
監事	富永 正義(村監査委員)
"	宮崎 捷(")
幹事	石原 守(村教育次長)
"	林 忠彦(")
"	松下 節子(村教育委員会主事)

○谷田遺跡調査団

団長	友野 良一(日本考古学協会員)(中川村文化財調査委員)
調査員	木下 平八郎(長野県考古学会員)
"	小木曾 清(宮田村)

第3節 発掘調査の経過

月 日	日 誌
5月18日	重機による耕土はぎ。機材の運搬。
19日	15時より中川村遺跡調査会を行い、16時より現地において鍵入式を挙行し、続いて美里集会所で発掘の無事と成果を願って直会。
20日	グリッドの設定。D-1グリッドの鍵連がけ。
21日	D-1, E-2グリッドの鍵連がけ。D-1グリッドより敷石遺構の確認。
22日	敷石遺構の調査。レベルポイントの確認。鍵連がけを行う。
25日	D, E-2グリッドの鍵連がけ。敷石遺構の実測。
26日	E-2グリッドの鍵連がけ。ミニチュアの双耳土器?出土。
27日	D, E-2グリッドの鍵連がけ。台座のような小型土器出土。
29日	敷石遺構のレベル測量。E-2, 3グリッドの鍵連がけ。
30日	E-2-4グリッドより土偶の片足出土。D-2-24グリッドより埋甕の上部確認。
31日	E-3グリッドより住居址が確認され、第1号住居址とする。D-2-24グリッドの埋甕(第1号土坑)の写真撮影・掘り下げ・断面図・取り上げ完了。
6月1日	第1号住居址の調査。清掃・写真撮影。D, E-2グリッドより住居址らしい遺構の確認。D-3グリッドの鍵連がけ。
2日	D, E-2グリッドの遺構を第2住居址とする。またE-2-9グリッドより埋甕(第2号土坑)が出土する。写真撮影・掘り下げ・断面図・取り上げすべて完了。
4日	D-3グリッドの鍵連がけ。礫が多いためこの地点での遺構はないと思われるので、E-3グリッドの鍵連がけに移る。第2号住居址の掘り下げ。
5日	E-3グリッドを中心に住居址確認。(第3号住居址とする) 第2号住居址の実測図。第1号住居址のレベル測量。E-4グリッドの鍵連がけ。
6日	第2号住居址の清掃・写真撮影・レベル測量。第3号住居址実測図。E-4グリッドより土器が出土するが遺構の確認はできない。
8日	朝遺跡調査会議を開く。D-4~8グリッドの部分的な鍵連がけを行うが、ローム層となり、数回にわたる水田等の造成により遺構が壊されたものと思われ発見することはできなかった。第2号住居址の南壁中央近くの石の下に埋甕が発見される。取り上げについては後日とする。
9日	B-6~8グリッドの部分的な鍵連がけを行うが、途中より雨がはげしくなり、本日の作業を中止とする。
11日	B-9, 10グリッドの鍵連がけ。B-10グリッドよりピットが多く発見されたが、木の根とも思えるものもあり、もう少し調査をすることとする。B-10グリッドより住居址の確認。(第4号住居址とする) 第3号住居址の清掃・写真撮影。第2号住居址の埋甕の掘り下げ・断面図・写真撮影及び取り上げ。E-4グリッドの掘り下げ、多くの土器

6月11日	出土状況と無遺構より土器捨て場と考えられる。
12日	第4号住居址の実測図・清掃・写真撮影。引き続き調査を行う。第3号住居址のレベル測量。E-4グリッドの土器取り上げ。遺跡調査会を開催し、現地説明会を16時より行い地元の方々に調査の概要等を報告する。
15日	土器捨て場の断面図作成、及び掘り下げをする。
16日	土器捨て場の掘り下げ。第4号住居址実測図の補足及びレベル測量。
17日	E-4グリッドより第3号土坑が確認され、清掃・写真撮影・実測図・及びレベル測量。全体の見直しを行い、現場での発掘作業を終了とした。
7月20日	遺跡調査団会議を開催し、今後の打合せを検討する。
21日	出土遺物の整理。
9月8日	報告書作成のための整理作業をはじめる。
1月29日	報告書作成の作業終了。

今回の発掘調査にあたり、深い御理解と御協力をいただいた、地元の関係の方々・発掘調査に直接参加下さった方に心より感謝申し上げる次第です。

発掘調査に参加された方々、また調査に御協力された方々。（順不同・敬称略）

白澤 文雄・宮崎 治示・谷澤 公平・米山 昌宏・石原 与・湯沢 恒雄・谷村 末松
 西村 益・白澤 豊藏・西村けさよ・横前 千花・有賀 優子・宮崎 恵子・谷澤 律子
 宮崎 薫・横澤 定子・白鳥まち子・下平 博行・下平 敏子・横前 秀幸・宮沢 幹

第Ⅱ章 遺跡の位置

第1節 遺跡の位置 (第1図)

谷田遺跡の地理的位置は、東経137度58分07秒、北緯46度35分46秒で、標高740～760m。長野県上伊那郡中川村大草美里谷田地籍に所在する。この谷田遺跡に至るには、JR飯田線七久保駅より東方6km。国道153号線より東方約3kmの位置にある。

第2節 地形及び地質 (第2・3図)

1) 地形(第3図・図版1)

谷田遺跡の所在する美里地籍は、伊那山脈に属している。この伊那山脈は高さ1,000mから1,700mの中山性の山脈で、竜東を赤石山脈の前山の形をとり、ほぼ南北に走っている。この山脈は大きくまとめて、二つの系列がある。一つは西側の天竜川よりの列で高鳥谷山(1,331m)

—陣馬形山(1,445m) ——大領山(1,020m) ——と続く山脈と、さらにその東側に戸倉山(1,630m) ——大西山(1,741m) に併行して走る二つの系列がある。前者の山頂は伊那盆地に直面しているが、後者は高度も前者より高い。

美里地籍は陣馬形の南西傾斜面に当り延長7kmにおよび、その平均勾配は7度を測る。谷田遺跡附近は約4度くらいとやや平坦な地形である。また、遺跡より北西側にある西丸尾地籍あたりはそれよりやや平坦で3度～4度のところがある。これらのうち急斜面には断層崖が見られる。これには「陣馬形山断層崖」と名付けられている。しかし、全体的には木曾山脈の東面に比較すると、伊那山脈の西斜面は傾斜がゆるやかである。段丘分布東限は、沢の天竜川合流点から1～2kmであるが、その辺には流や早瀬などからなる勾配の変化する地点があり、それより奥ではかえって谷幅も広く開け、勾配もゆるやかになっている。そしてそのあたりでは、尾根筋も幾分平坦で、天竜川から東方2～4



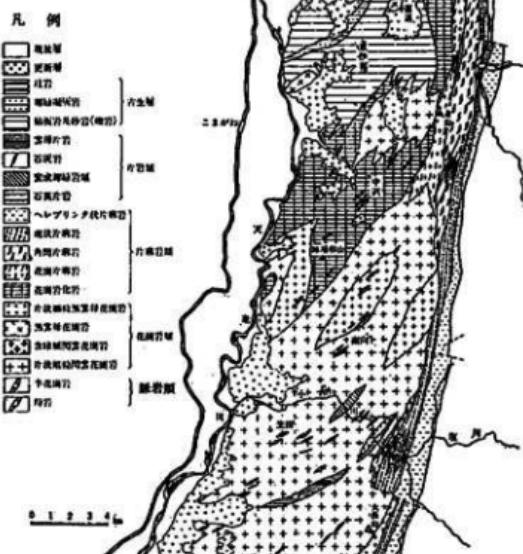
第1図 谷田遺跡の位置図

kmの間には、山麓階ともいえるようなややなだらかな面がある。これが実は美里の生活面となっている。谷田遺跡の所在する陣馬形南西の標高800m内外の西丸尾・丸尾・黒牛・谷田のあるあたりは、かつては山崩が多発した地帯であったので、現在の耕作地は礫・砂・粘土からなる崖錐堆積物でおおわれている。

2) 地質 (第2図)

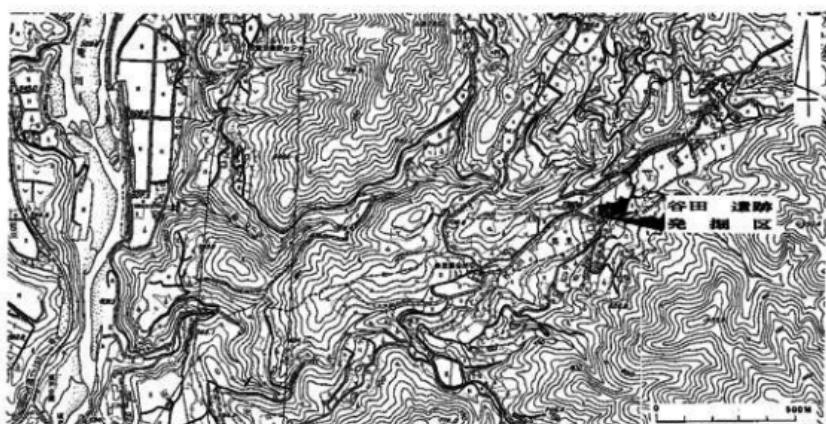
中川村の竜東地域は領家變成岩と花崗岩類で形成されている。そのうちでも、最も広く分布しているものは、片状粗粒閃花崗岩である。これは平に割れやすく、いわゆる片理性をもつ岩石で、石英・長石・黒雲母・角閃石を主成分とする岩質の地層である。

ここ谷田遺跡の地層は、前述



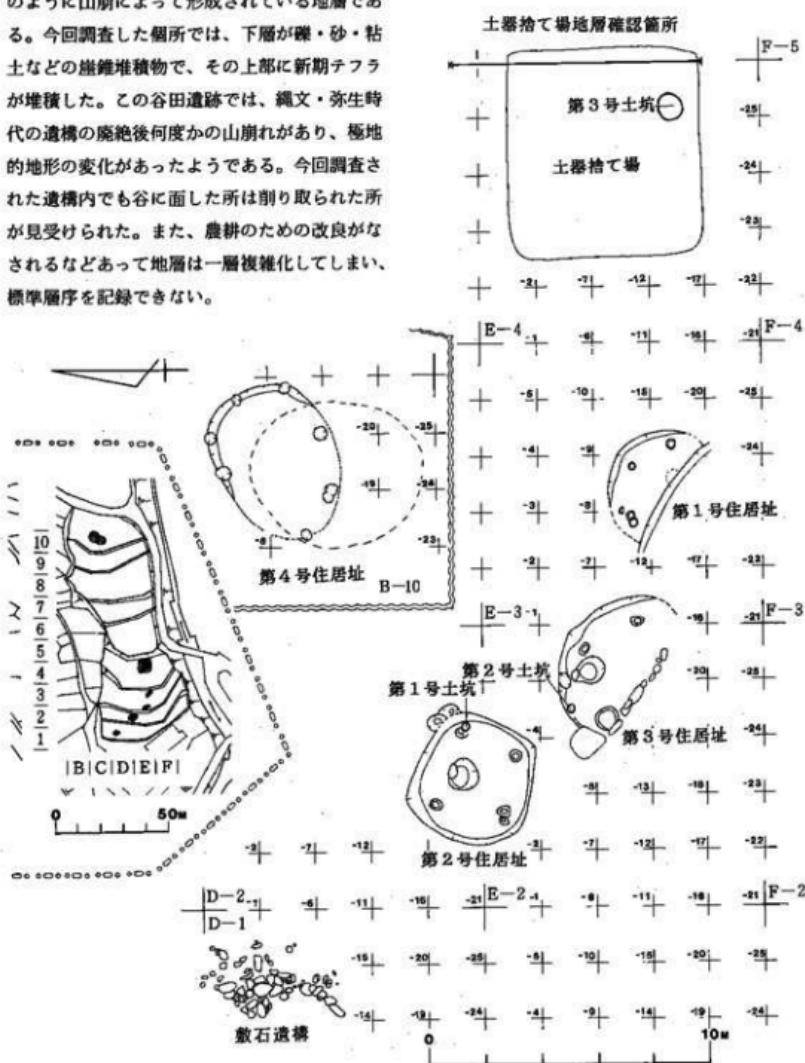
第2図 上伊那南部竜東地方の地質図

(石井清彦・植田良夫・島津光夫三氏の原図による)



第3図 谷田遺跡の地形及び発掘区

のように山崩によって形成されている地層である。今回調査した個所では、下層が礫・砂・粘土などの堆積物で、その上部に新期テフラが堆積した。この谷田遺跡では、縄文・弥生時代の遺構の廃絶後何度かの山崩れがあり、極めて地形の変化があったようである。今回調査された遺構内でも谷に面した所は削り取られた所が見受けられた。また、農耕のための改良がなされるなどあって地層は一層複雑化してしまい、標準層序を記録できない。



第4図 造構配図

第Ⅲ章 遺構と遺物

第1節 調査の概要

谷田遺跡の発掘は、中川村及び文化庁補助による委託事業である。本遺跡は相当以前から知られていた遺跡である。本遺跡は昭和62年度内に調査を完了させることになっている遺跡である。

遺跡の調査範囲は東西60m・南北120mに分布している遺跡で、調査の対象となった広さは、東西40m・南北100mで、4,000m²を調査した。この谷田遺跡は北から南に10%の勾配で傾斜している。遺跡の地目は古くは畠地であったようだが、その後の土地改良事業で水田となったようである。したがって、畠や水田などの耕作のため、かなり破壊されてしまったものと考えられる。今回の調査に当っては、土地所有者による今までの遺物の発見状況なども参考にして、発掘地域を決定することとした。

調査は階段状の水田であるため、切取個所と埋立個所とを確認し、埋め立てられている個所を中心とした調査を行った。

調査の結果、縄文時代中期後葉の住居址3軒・土坑3基・土器捨て場と考えられる遺構1基。縄文時代後期の敷石遺構1基・後期の住居址1軒を調査することができた。

第2節 遺構と遺物

概要

1 土器

発見された土器は、表採891片・グリッド出土が1,903片・第1号住居址出土50片・第2号住居址出土1,210片・第3号住居址出土950片・敷石遺構出土20片・第4号住居址出土570片・土器捨て場出土1,834片・土坑より3個であった。今回の遺物整理中に確認された遺物は、縄文時代前期と考えられる口縁部の折返部分及び口含に縄文を施した變形土器。縄文時代中期中葉の井戸尻期の土器。縄文時代中期後葉曾利I～IV期に比定される土器。出土土器片総数は7,422片を数えた。

2 石器

出土した石器は720個を確認できた。その内訳は、第1号住居址14個・第2号住居址68個・第3号住居址38個・第4号住居址67個・敷石遺構7個・グリッド85個・表採32個・その他剥片403個である。



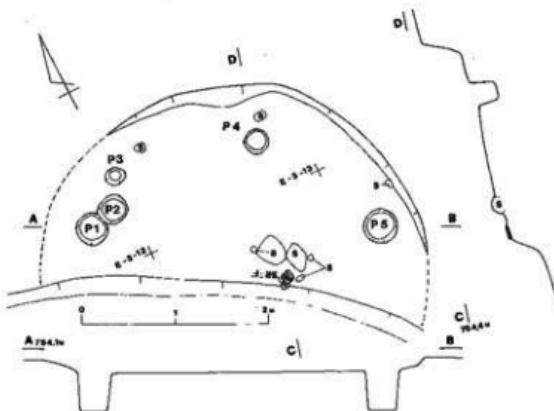
発掘調査に参加された方々

第1号住居址

遺構(第5図・ 図版2)

本址は、E3グリッドの中央南よりに検出された住居址である。いつの時期か不明であるが水田造成時に南西半分を削り取られているがわずかに残存する壁の状態より推測するに、プランは4m前後の円形と考えられる。どの土層より掘り込まれたか不明である。壁高は北東側で37cmを測り4.5

m残存する、壁の状態は良好である。周溝は無い。床面は水平でよく締まり砂質ロームにしては良好である。主柱穴はP1,P4,P6の3個が考えられるが他は削り取られて不明である。その径は30cm前後、深さ40cmを測り底部は平である。炉は東壁より1.2m中央よりあり、平板な川原転石が北東部に2箇とその石の間に詰めたと考えられる小石が3個残っており他は失われていた。掘り込みは6cmと浅く、炉底には燃土がわずかに堆積しており、炉内より土器の胴部、底部が検出された。



第5図 第1号住居址実測図

遺物(第6図・図版2)

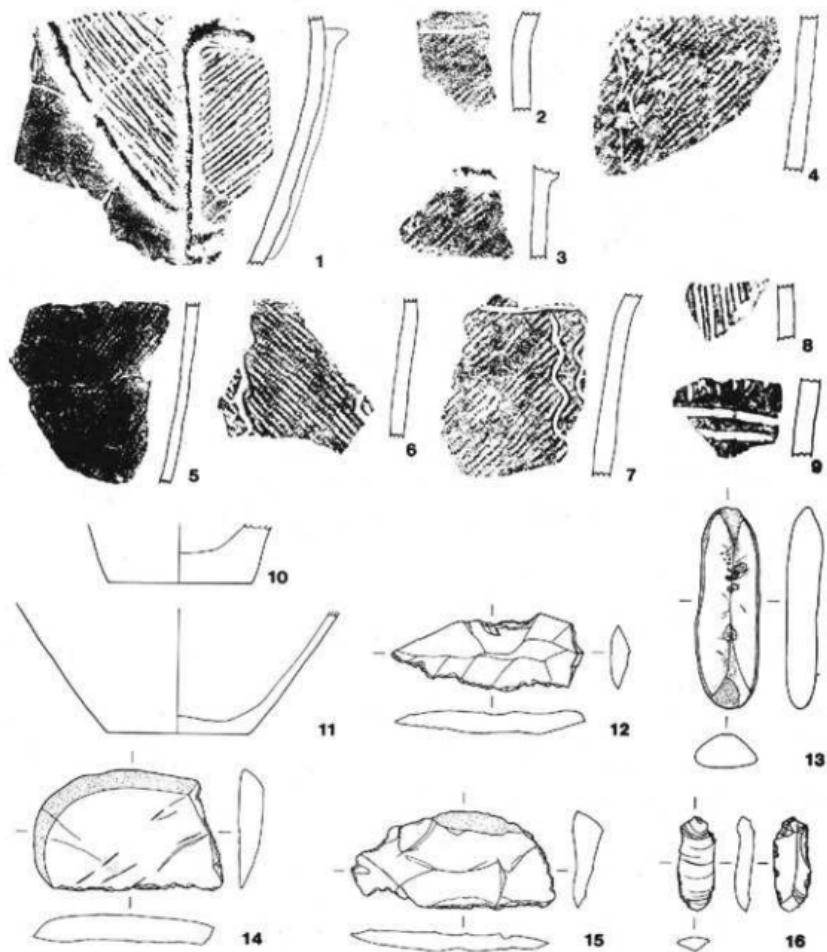
土器 住居址の半分が失われているので遺物の量は少なく、大半が炉内出土すべて破片である。第6図の1 隆線と沈線で構成されているもの。2~4, 7 繩文の地文に隆線と沈線が施文されたもの。9 禾本科植物による横と縦の沈線が施文されたもの。11 斜繩文の深鉢の底部である。床面からは4点出土。5 斜繩文。6 斜繩文に沈線。8 禾本科植物による縦位の沈線が施文されたもの。10は深鉢の底部で網代痕を有するものである。

石器 5点出土しており、12,14,15は、硬砂岩の横刃型石器。13 棒状三角形の緑色岩の川原転石で、各面と端に打痕が認められるたたき石。16 黒曜石のはく片で、両サイドに刃こぼれらしきものが認められるが使用されたかは不明である。出土遺物より見て、繩文中期後葉の住居址である。

第2号住居址

遺構(第7図・図版3,4)

本址は、D3とE3グリッドの境の中央に検出された住居址である。今回の調査でプランの確認ができる唯一の遺構である。プランは、隅丸方形で西側が胴張りとなる変形のものである。東西4.35m、南北4mを計る。掘り込みは自然堆積の疊層より掘り込まれており壁高は、東、西北は55cm前後、南



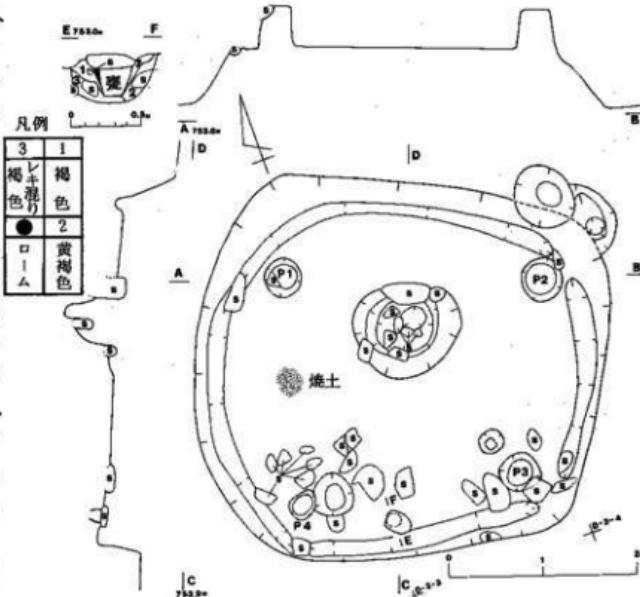
第6図 第1号住居址出土土器拓影及び石器実測図 1~15(1:3) 16(1:1.5)

は27cmと低い。壁の状態は砂礫層であるが良好である。周溝は壁直下を巾20cm前後、深さ10cm前後で巡る。床面は、礫まじりの砂質ロームであるが良く締まっており良好である。主柱穴は、P 1~P 4で径は40cm前後、深さ40cm前後で、P 4のみ変形で小さい。その東には深さ8cmのすり鉢状のくぼみがある。共に底は平である。東側コーナー壁上に存在するピットは、本址より新しいものである。炉は北壁よ

り85cm中央よりにあり、
炉石は奥の1個を残す
のみで他は抜き取られ
ており掘り込みより見
て1×1.15m、深さが
48cmの石囲炉で、内部
に礫が落ち込んでおり
焼土はわずかに残存し
た。埋甕は南壁中央直
下にあり、花崗片麻岩
の26×32×6cm大のふた
石がしてある。砂疊層
を掘り込んで埋められ、
底は礫に接しておりそ
れ以上掘るのが困難な
ため土器を切断したもの
と考えられる。

**遺物 (第8図9,10
図版4)**

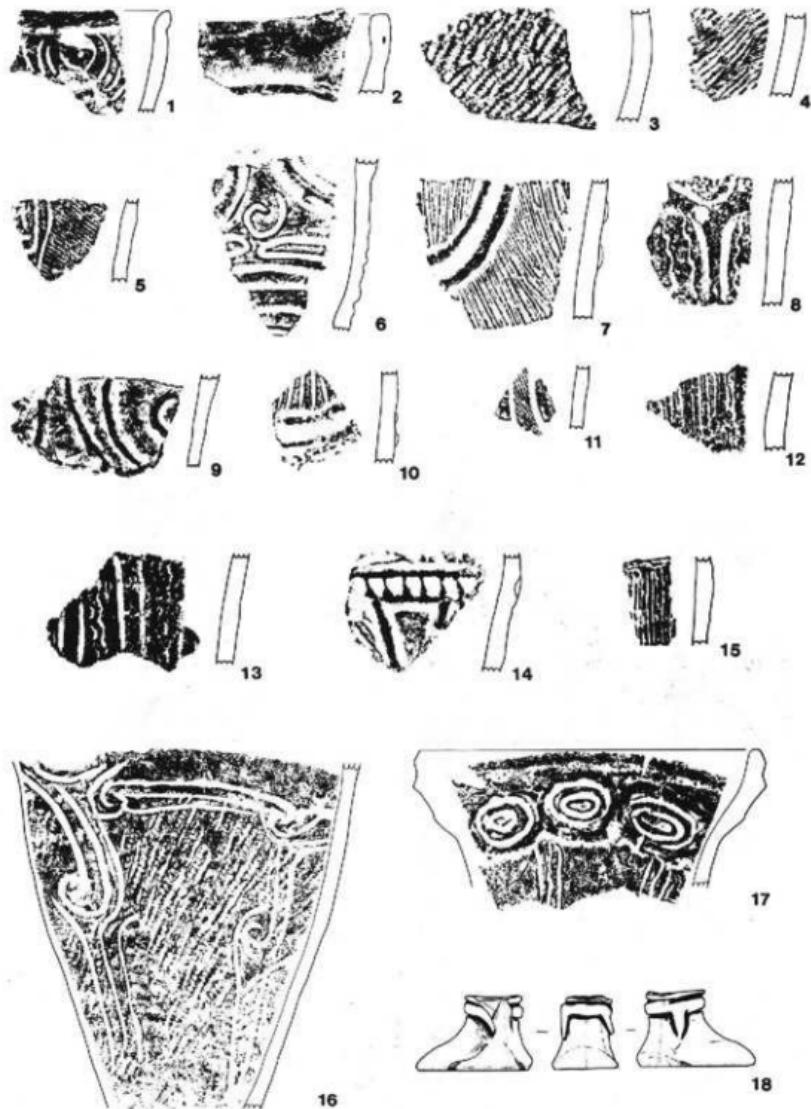
土器 覆土中より多
量の土器片が出土した。



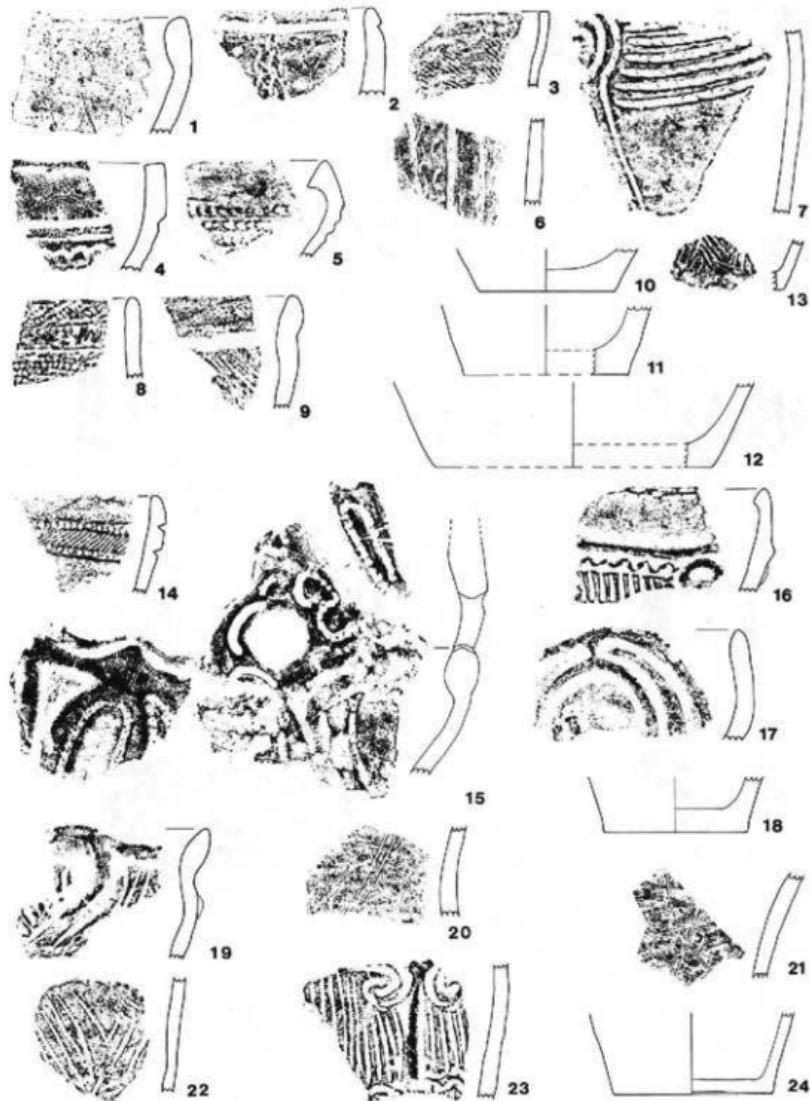
第7図 第2号住居址実測図

本址には投げ込みと考えられる礫が400個以上あり、床面上に存在した礫もその一部と考えられる。第8図の1は、玉縁口線とその直下を4重の半円の沈線で施文されたもの。2 無文の口線で直下に3.5cm前後に刺突連続文を施文するもの2点。3～5, 8, 11, 13 縄文の地文に隆線と沈線で施文されたもの。6, 7, 9, 10, 14 隆線と沈線で施文されたもの。12, 15 様状工具で縦位に施文されたもの、以上は床面出土である。16 南壁直下にある埋甕で、上下を切断しており、現高18.5cmを計る。17 口縁から頭部にかけてのもので、半個体分であるが二つに折り重ねて埋甕の中に入れてあった。18 土偶の右脚部である。第9図 1～8, 10～13の底部は投げ込まれた礫の上層土中のものである。9, 14～18 矮中とその周辺のもので、覆土中の中層出土のもの。19～24 投げ込まれた礫層下より出土したものである。20, 21 同一個体と考えられ施文も谷田では異質なものである。第10図 1～5 水田地場下覆土上層のもので住居址の掘り込みより上のものである。

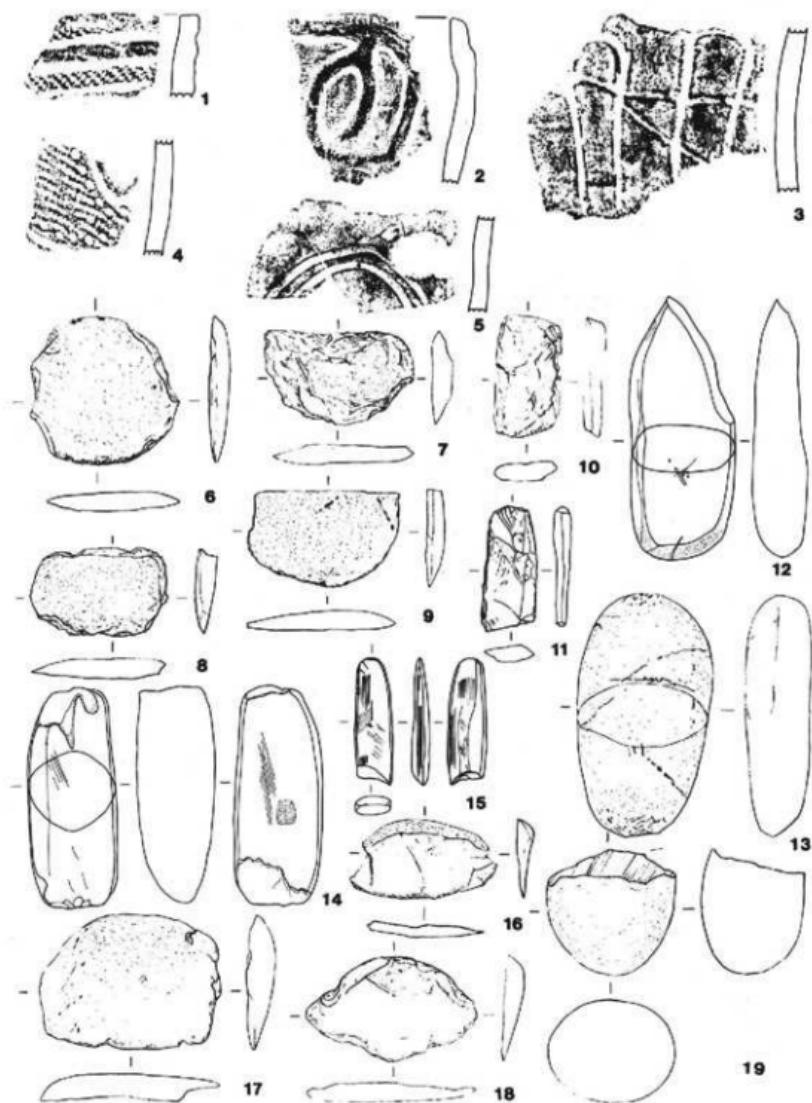
石器 第10図 6～9 横刃型石器で硬砂岩である。10 打石斧で緑泥片岩。11 打石斧で粘板岩。12, 13 たたき石で硬砂岩。14, 15 磨製石斧で緑色岩。16～18 横刃形石器で硬砂岩でいずれも床面出土。19 片磨岩の磨石で半分位欠損していて、炉内出土。遺物より見て、縄文中期後葉の住居址である。



第8図 第2号住居址床面出土土器拓影 (1:3)



第9图 第2号住居址出土土器拓影 (1:3)



第10図 第2号住居址出土器拓影及び石器実測図 (1:3)

第3号住居址

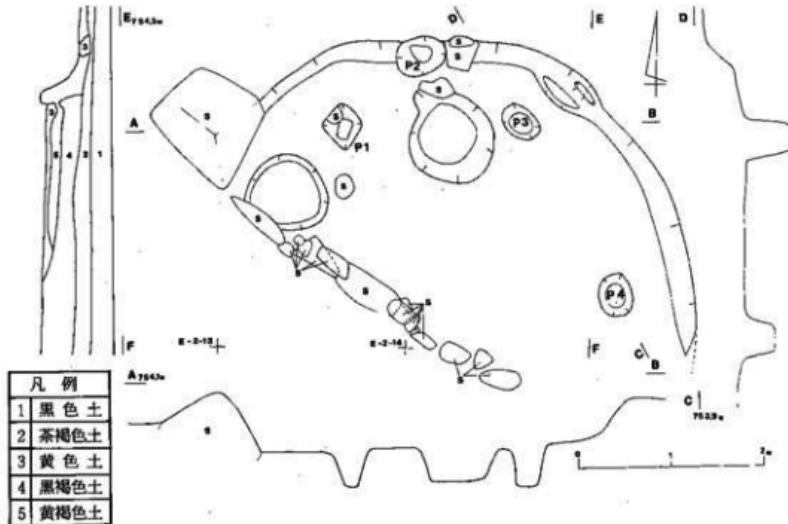
遺構(第11図)

本址は、E2グリッド東側中央に一部E3グリッドにかけて検出された。この住居址も第1号住居址同様水田造成時に約半分が失われており南西に残る石垣を作るときに床面は削られたものである。プランは、残存する遺構より見て径が5.5m前後の円型の住居址である。掘り込みは、北西にある第2号住居址より礫の少ないローム混りの層より掘り込まれている。壁高は北東で37cm、南西に伸びるに従い低くなり15cmとなりあと失われ不明である。壁及び床面の状態はあまりよくない、ピットは4個検出された。主柱穴は、P1、P4が考えられる。径45cm前後、深さ35cm前後、底部は平らである。北東の壁に添ってあるピットは上方より入り込む水分のためのものか。炉は、北壁下より40cm中央よりあり、炉石は1個を残して抜かれているので、どのような石が使われていたか不明である。すり鉢状に40cm掘り込まれており、焼土は他の炉址同様砂質のためかはっきり認められない。

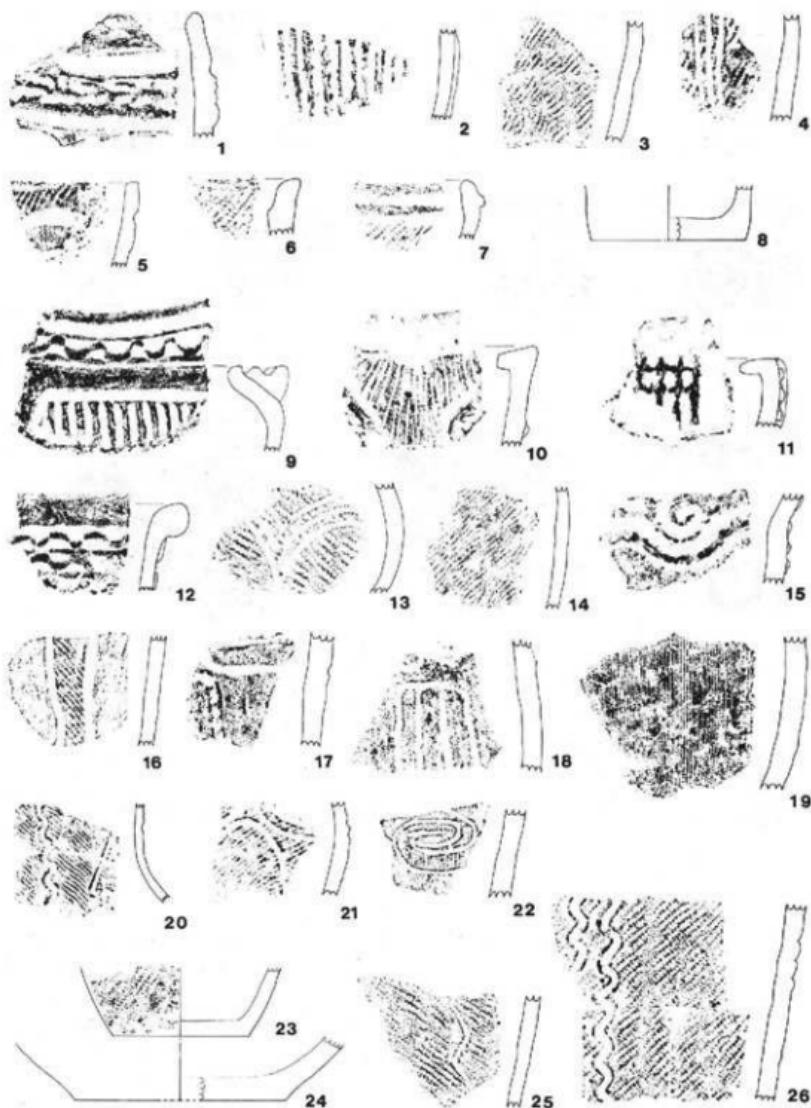
遺物(第12、13図)

土器 第12図 1~4 北壁にある転石より20cm中央よりにある径90cm前後の深さ16cmの浅いピット内出土のもの。5~8 5層出土のもの。9~26 4層出土のもの。第13図 1~3 2層出土。4~12 1層出土のものである。

石器 第13図 13 線形の石匕で硬砂岩。14 黒曜石の石簇。15 打石斧。以上3点は、5層出土。16 打石斧。17 川原転石の周辺を軽く敲いたもの。18~20 横刃形石器である。18は緑色岩で、他は硬砂岩である。床面近くの遺物より見て縄文中期後葉の住居址である。 (木下平八郎)



第11図 第3号住居址実測図



第12図 第3号住居址出土土器拓影 (1:3)



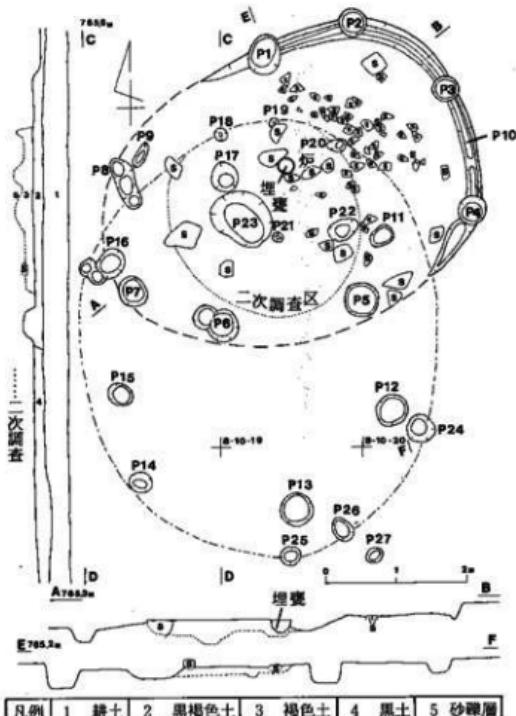
第13図 第3号住居址出土十器拓影及び石器実測図1~13, 15~20 (1:3) 14 (1:1.5)

第4号住居址

遺構(第14図、図版6,7)

本址は、進跡の東側最上段のB10グリッドに発見された竪穴式住居址である。言い伝えによれば以前には民家・池等もあり、水田造成時にはその大部分が破壊されたことから今回の調査では、水田の地場下にわずかに遺構を残すのみであった。炉を境にして高い部分の北東側は砂礫層を掘り込み、低い面に当る南西側は褐色土を埋土して床面を造成したと考えられる。埋土中には繩文中期の土器片が多數出土した。このことは、他の遺跡の遺構を破壊して削り取って低い面を埋め立てたと考えられ、流出遺物とか、土器捨て場と言うよりは、検出された柱穴の配置状態から見ても、本址と複合した他の遺構があったのではないかとも推測出来る。

本址の推測出来得る規模は、概ね長軸約5.7m、短軸約4.3mを計るはばだ円形を有するものと考



第14図 第4号住居址実測図

えられ、主軸の方位はE-27°Nを示す。壁は東北部に検出され、壁高は東側の高いところで約25cm、北側で約10cmを計る。ピットは別表(第15図)の如く発見されたが、本址の主柱穴は、P1～P8で周溝の深さは10cm～15cmである。床面は荒れていて、前述した如く東北部の砂礫層には、10cm～20cm大の花崗岩の角ばった山石で平らに敷石の如く埋まり、人工的なものか、自然の礫層の中の石が露出したものかは確認出来なかった。半面の南西部は、埋土で褐色を呈し、その中央部にわずか床面と思われる個所が検出され平らに貼床されていたが、床面としては搅乱等もあり固さに欠けていた。床面は東側が高く西側が低く、その比高差は約13cm前後である。炉は、中央やや北東側よりに位置し、約25～40cm大の花崗岩で築かれた石囲み炉で、規模は約1m前後の円形を呈するものと思われるが、約半分が破壊され搅乱によって炉石が取り去られているので定かの事は言えない。炉内には燃土が検出されず黒土で埋まっていて炉の深さも搅乱によって確認出来なかったが、炉の南西部隅に直径約27cmで口縁と底部破損の甕が据えられており焼けて一部ぼろぼろになっていた。また、その甕の下に上

の壺を受けているように他の違った底部だけの無文の焼けた粗製土器が出土した。本址に関係する遺物は、炉の周辺及びその南西部のわずかに残った覆土中に集中して出土しているものの、炉中の埋甕が本址の時代決定に代表され、縄文中期最末期の影響を受けていると思われる縄文後期前半に比定されるものと考えられる。なお、P11及びP16~P23は、二次的調査に於いて、第4号住居址の貼床された他の遺構との複合部分の床面の下部より縄文中期の土器を伴って発見されたものであるが、最初発見されたP12~P15をこれにつなぐプランは概ねだ円形を呈し、その規模は長軸約6.1m、短軸約5.0mを計る住居址が存在したとも考えられるが、証明される要素に欠けるので、本調査では住居址とせず柱穴遺構の存在のみに留めておくことにした。

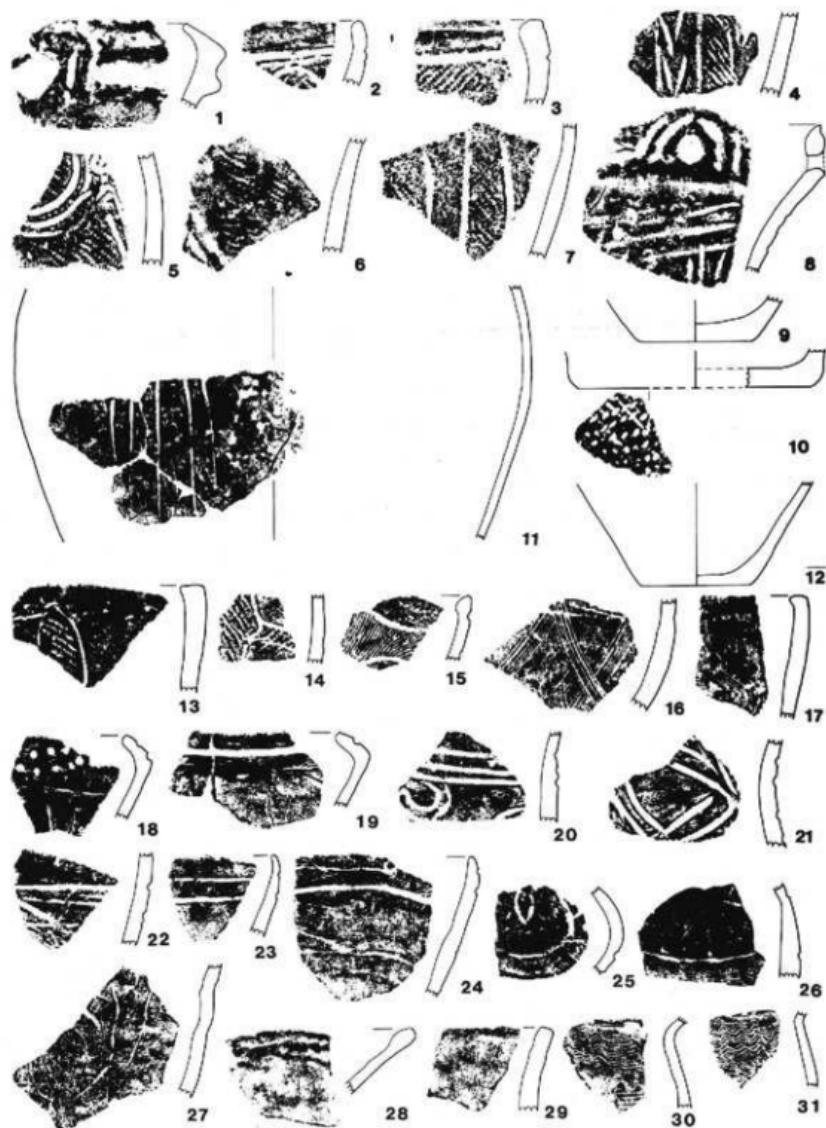
遺物(第16図、17、國版6、7)

土器 第16図 1~10 二次的調査で第4号住居址の床面の下から出土し、曾利II~IIIに併行するものと考えられる。1 口縁部に二条の隆帯とX状把手を施す。2、3 口縁の下に縄文を施し、3には沈線の区画内に縄文を施してあるもの。4は綾杉文と縄文。5 縄文を地文として沈線を渦巻状に描き地文を摩消してある。6 縄の隆帯に摩消縄文。7 摩消縄文土器。8 波状口縁に孔があげられ二条の沈線が孔に沿って描かれ下部は沈線による文様が施され縄文後期の要素も含まれると思われる。9 無文の底部。10 無文で底は綱代痕。11 炉内に出土した埋甕で、無文の地に綫の沈線が4~5本1組で胴部を5分割して施されているものと思われるが焼けただれて復原出来ず、さだかではない。12 埋甕の下に重なって出土した無文の粗製土器で赤く焼け内部に煤が付着。13~15 縄文を地文として沈線で地文を摩消した土器で縄文後期前半のものと思われる。16、17 構造工具による沈線文様を施す吉井貝塚第3群の土器に併行されると思われる。18~26 無文に籠状工具による沈線文様を施す井戸・徳利遺跡の縄文後期前半の土器に併行されるものと考えられ、その内18、19は口縁が内湾し、前者は二条の交互刺突文を、後者は横の沈線を施す。27 無文の粗製土器で籠状工具による綫の沈線を施す。28、29 無文土器で28はヘラ調整をしてある。30、31 頭部に櫛がきの波状文が描かれた弥生時代末期の中島式に比定されるものと思われ、水田造成時に土と共に撒入されたものと思われる。

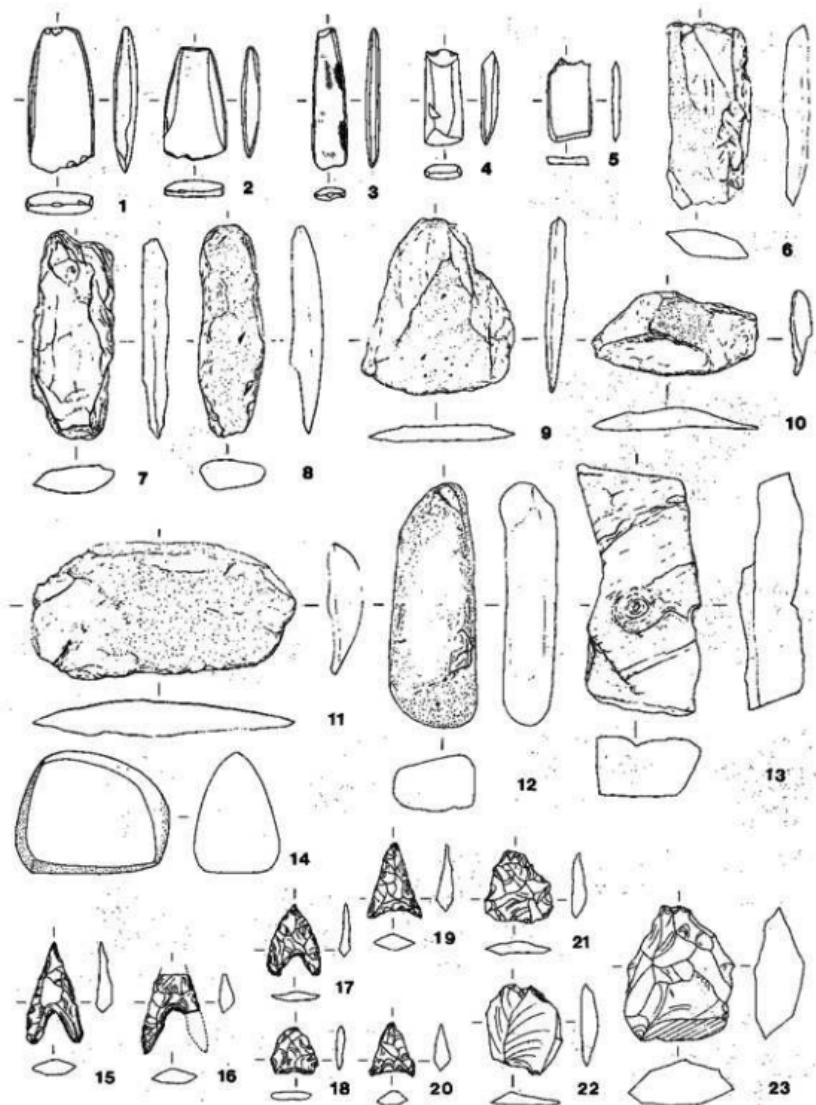
石器 第17図 1,2 緑泥片岩の磨製石斧。3,4 緑色岩の磨製石斧。5 粘板岩の磨製石斧で半分が欠損している。6,8 硬砂岩の打製石斧。7 緑色岩の打製石斧。9~11 硬砂岩の横刃型石器。12 硬砂岩の敲打器。13 砂岩の凹み石。14 冠状の磨石で火を受けている。15~21 黒曜石

Pit No	住居別	風 横 別 (大きさ・深さ)cm	Pitの地層	Pitの種類別
P 1	4号住	60×60 -25	砂 積 層	主 柱 穴
P 2	"	40×38 -17	"	"
P 3	"	38×37 -16	"	"
P 4	"	40×40 -24	"	"
P 5	"	50×50 -30	褐 色 土	"
P 6	"	48×45 -20	"	"
"	"	45×43 -16	"	補助的柱穴
P 7	"	45×44 -17	"	主 柱 穴
P 8	"	76×32 -15	"	"
"	"	" -11	"	補助的柱穴
"	"	" -10	"	"
P 9	"	40×17 -11	"	埋 状 潜 穴
P 10	"	" -10~-15	砂 積 層	柱 穴
P 11	その他	40×30 -17	褐 色 土	柱 穴
P 12	"	52×45 -17	"	"
P 13	"	48×47 -15	"	"
P 14	"	35×33 -19	"	"
P 15	"	37×37 -25	"	"
P 16	" (2次)	48×48 -13	"	"
P 17	" (2次)	38×33 -26	"	"
P 18	" (2次)	17×17 -12	砂 積 層	小 ピット
P 19	" (2次)	17×15 -3	"	"
P 20	" (2次)	30×20 -14	"	"
P 21	" (2次)	17×15 -10	褐 色 土	柱 穴
P 22	" (2次)	45×30 -10	砂 積 層	"
P 23	" (2次)	67×70 -15	褐 色 土	土 坑
P 24	"	40×40 -12	"	補助的柱穴
P 25	"	36×28 -7	"	"
P 26	"	31×28 -16	"	外部 施設
P 27	"	23×21 -8	"	"

第15図 第4号住居址及びその他のPit一覧表



第16图 第4号住居址出土器拓影 (1:3)



第17図 第4号住居址出土石器実測図 1~14. (1:3). 15~23 (1:1.5)

の石鏃。22, 23 スクレーバー。

(小木曾 清)

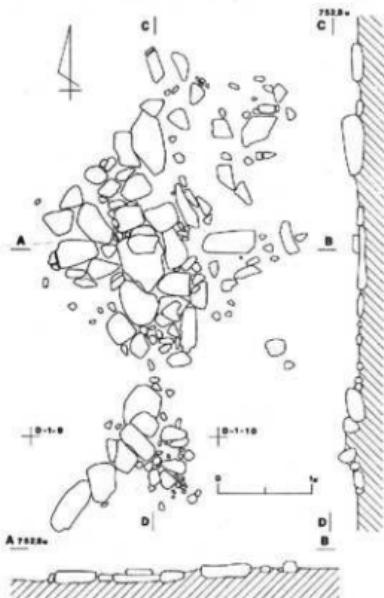
敷石遺構

遺構 (第18図、図版5下)

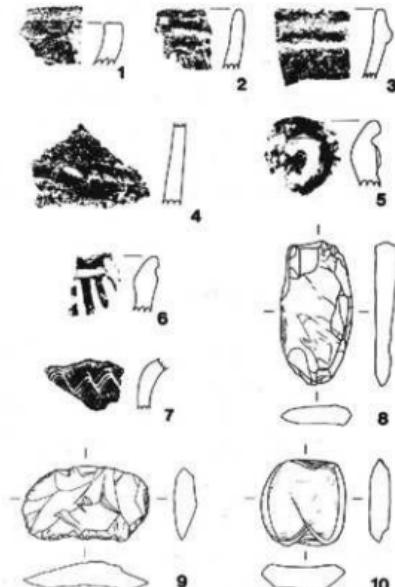
本址は、D 1 グリッドの北東部に検出された遺構である。大は、35×70cm、小は、拳大の上面が平らになる躓を 3 × 3.5 m に敷いてある。平石はほぼ水平に敷いてあるが原地形が東から西に傾いているため、東側が 8 cm 高くなっている。南側にある石群は、石の形態と組み方よりみて同期のものとは考えられず、石と石の間に入り込んでいる土も締まっておらず、初期開拓時の石垣の残石かもしれない。

遺物 (第19図)

土器 第9図 1～3 繩文後期の無文土器の口縁部。4は、胴部。5, 6 繩文中期の口縁部。
7 弥生後期の壺の頸部。遺物の量が少ないので時代決定は困難だが繩文後期の遺構と考えたい。
石器 8, 10 粘板岩の打石斧と石鏃。9 硬砂岩の横刃型石器である。



第18図 敷石遺構実測図



第19図 敷石造構出土土器拓影及び石器実測図
(1:3)

第1号土坑

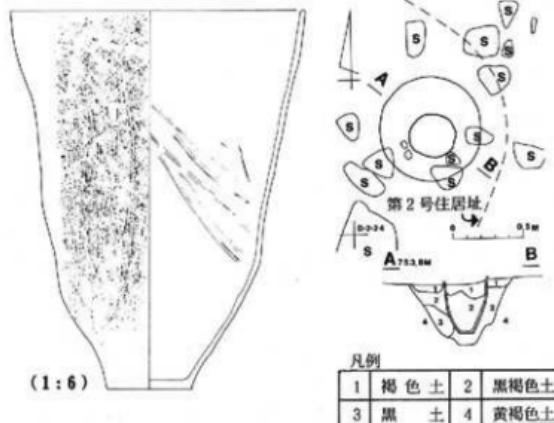
遺構(第20図)

本址は、D 2-24グリッドに検出された。水田地場下の元耕土と考えられる褐色土を削っている時点で土器の口縁部が発見された。この時点では第2住居址プランは不明であった。周囲を注意しながら掘り下げていくと住居址の東北隅のコーナーが現われた。

始めは浮いた土器と考えたが、土器周辺の礫の在り方から土坑の中に入れた土器であることが確認されたので住居址を調査する前にこの土坑の調査を開始した。プランは、平面円形で、すり鉢状に掘り込まれて中心に完型土器が正位に埋められていた。

遺物(第20図、図版8)

土器は、口径31.5cm、高さ40cm、底部径8.8cm。器形は、口縁部から頸部にかけてわずかにくびれ胴下半部でわずかに膨れ底部へと続く。底部の中心に網代痕が残り周囲は消されている。器面に口縁直下より櫛状工具による縦の沈線が30cm余り同じように引かれている。第2号住居址の覆土上層よりの掘り込みという条件よりみて、繩文中期最終末か、後期初頭の時期の土坑と考えたい。

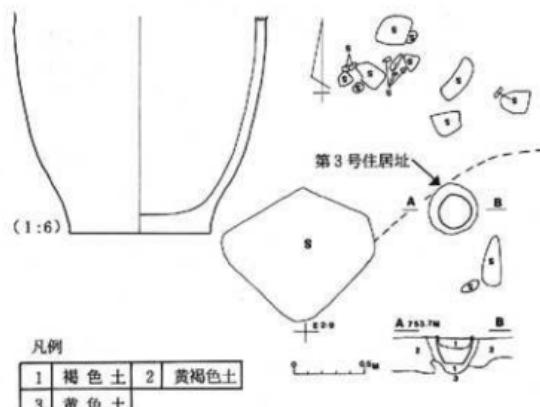


第20図 第1号土坑遺構及び埋甕実測図

第2号土坑

遺構(第21図、図版8)

本址は、E 2-9グリッドのはば中央に検出された。第1号土坑同様褐色土を削っている時点で、土器片が集中して出土し更に少し下ろすと土器の胴部が現われた。この土層は、水田造成以前に搅乱を受けしており、その時点で土器の上半分が破壊された可能性が強い。プランは不明であるが、現在残っている掘り込み



第21図 第2号土坑遺構及び埋甕実測図

は、径40cm、深さ25cmを測り平面円形の土坑と考えられ、その中心に土器を正位に埋めたものである。

遺物（第21図、図版8）

残存する高さは25cm以上あるが破片が接続しない。底部は意外と大きくて14.5cm、三本並の網代痕が一部に残っている。無文で器壁の厚さは1cmを測る。第3号住居址の覆土中に作られたもので、住居址より新しく無文であるため時期決定は困難だが、縄文中期末か後期初頭と考える。

第3号土坑

遺構（第22図、図版9）

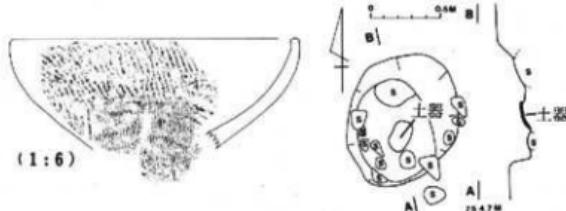
本址は、E 4-20グリッドに検出された。上部に縄文中期中葉の土器包含層があり、その最下部の砂疊層を掘り込んで作られている。

プランは平面80×100cmの

だ円形で、底は西に偏り50×70cmの平底となる。底の中央に何かを覆うような状態で土器の一部が底に接して斜めに置かれていた。

遺物（第22図、図版9）

土器は、16×19cmの浅鉢の口縁部から底部近くの破片が二つに折れしており、口縁から約8cm前後の巾で、大粒の縄文が施されている。その下に底部近くから上方に向けて先端を尖がらした棒の先で沈線が4mm前後の間隔で引いてあり一部縄文の境で三角の無文の場所を作る。口径は、推定30.6cm、器厚は1.5cm前後を測る。遺物よりみて縄文中期中葉の土坑である。

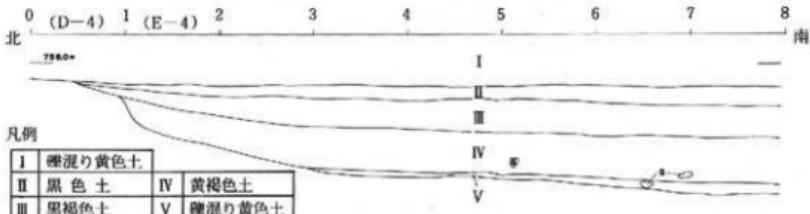


第22図 第3号土坑遺構及び土器実測図

土器捨て場

遺構（第23図、図版10,11）

本址は、E 4グリッドの中央から東に一部E 5グリッドにわたり、7×7mの範囲にかけて遺物が多量に出土した場所である。谷田川に向かって傾斜する地形で、水田造成時に尾根を削り取った土砂をこの斜面に運び埋土している。この埋土は、第V層と同じ土で、遺物は無い。包含層はII, III, IV層に多く含まれておらず、その下部に住居址の存在を考えたが、下層より遺構の検出は無かった。従



第23図 土器捨て場地層図

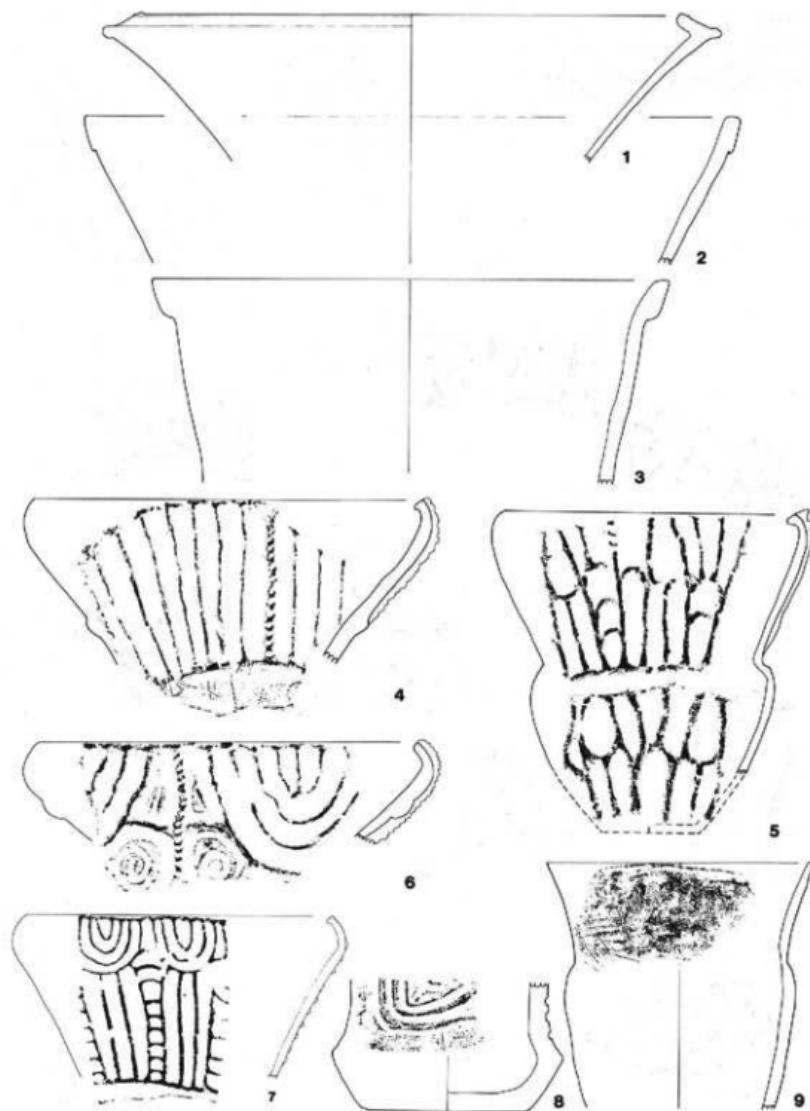
ってこれだけの遺物がどこから運ばれたか不明であるが、おそらく遺構は、尾根上に存在したと考えられ、過去の造成時に大半が削り取られたものと考えられる。谷田川は幾度か災害があり、最近では昭和36年に伊那谷を襲った36灾害時も谷田川は大きな被害を受けたため、川に接した両側が大きく削り取られており、遺物と共に埋土された川に近い場所の流失が考えられる。縄文中期の各地の跡で検出されている土器捨て場的様相があり、伊那谷の竜東地区では数少ない中期中葉の好資料を数多く提供してくれた遺構として貴重である。

遺物（第24、25、26図）

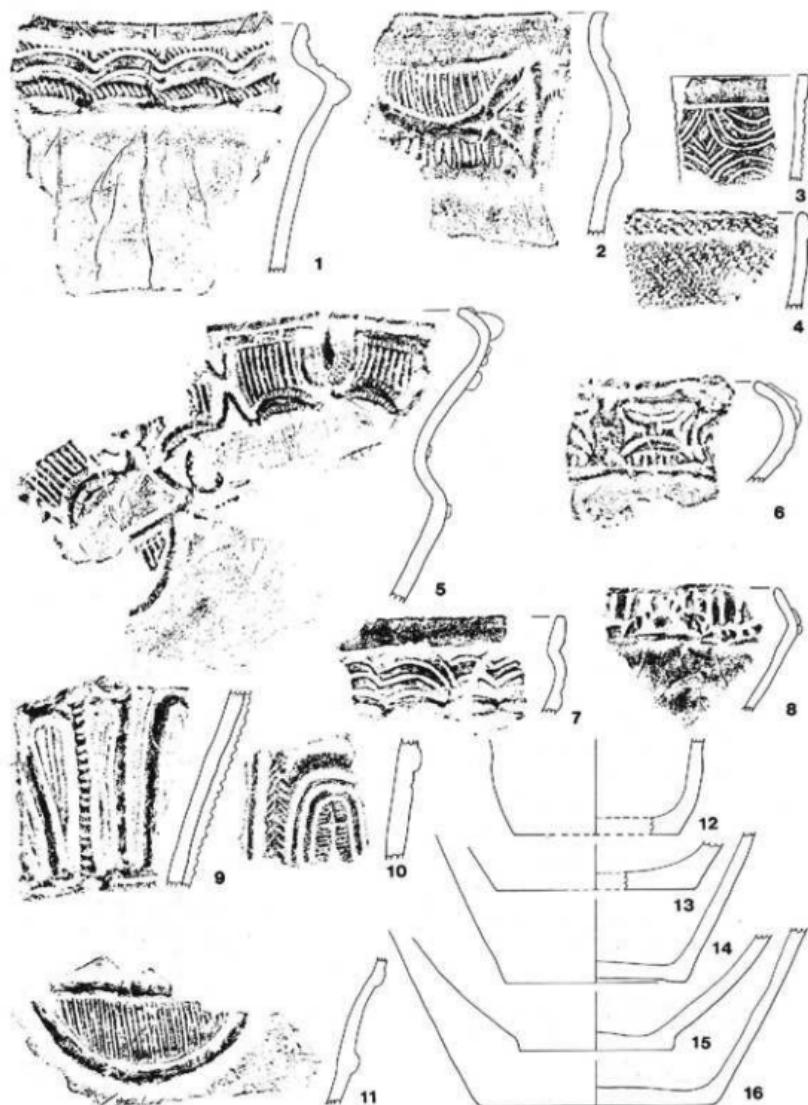
土器 第24図1 大型浅鉢で、巾4.5cm、厚さ1cmの口縁帯が中側を巡り、その内側を巾5mmの浅い沈線が端より1cm内側を、1.5cm間隔で二条巡り、その途中で径1.8cmの円形のくぼみを作る。肩から底部にかけて無文となり粗い仕上げである。縁帶とその内側は、なめらかに仕上げられており、一部に朱が残る。2、3 口縁部が折返しとなる無文の土器。4～7 隆起線文が主体となる土器。8 筒型土器の胴下半部で、屈折底となり、この形態の底を持つ土器が他に1点ある。9 肩からやや外反し5cm立ち上がる無文土器。第25図1 口縁帯下よりくの字型に屈折する。その上面に刻み目と連弧文が付き、背部を鎖状連続文が巡りその一個所に縁帶下から隆線が円弧状に下がり、肩と接する部分でひし状となり、胴下半部へ垂下する。肩下から胴下半部にかけて無文である。2 口縁直下は無文帯で、その下を隆線と沈線の櫛型文が弧状の口部分を接して上下に巡り、その間を縦の隆線が6cm垂下し、以下無文帯となる。3 簡型の小型土器で、沈線で四重の半円連続文が施文される。4 折返し口縁の口縁部と折返し部分、及び胴部に斜縞文が付くもの。5、6 小型土器で、口縁下から胴部にかけて半裁竹管による押引き文と隆線で構成される区画文とその下部を鎖状連続文が巡り、一部隆線がくびれ部分まで下り、くびれ下から腰部にかけて櫛型文が付く。器高は17cm前後と推定される。7 無文帯口縁部の下に連弧文が付くもの。8は、口縁部がくの字に屈折し、櫛型連続文が付くもの。9 隆起線文と沈線で構成され、隆起線の一部に刻目が付くもの。10 隆起線と沈線で、縦の隆起線に綾杉文の刻目が付くもの。11 深鉢の腰部で、櫛型文が付くもの。12～16 底部で無文。15は立上り部分が他の土器と違い弥生期のものか。第26図1 隆起線が口縁から縦に垂下するもの。この文様構成の土器では新しい時期のもの。2 玉縁口縁の無文土器ですり鉢形となるもの。3 縄文中期後葉初の土器の胴部である。

石器 第26図4～7 石鏃で共に黒曜石である。8 小型磨製石斧の刃部の破片で、綠泥片岩。9と10は横刃型石ヒで、両方共刃部に欠損部分があり、9はサスカイト、10は硬砂岩である。11 黒曜石の剥片から作られた石器で、先端部を使用したもの。12、13 川原転石の周辺を擦り石とたき石に使用したもの。この工具に使われる原石は、緑色岩系のものが多い。14～19 打製石斧で、16の刃部付近は土擦れによるものか磨いたようになめらかな状態である。15、16は、綠泥片岩で、他は硬砂岩である。20、21 横刃型石器で硬砂岩である。

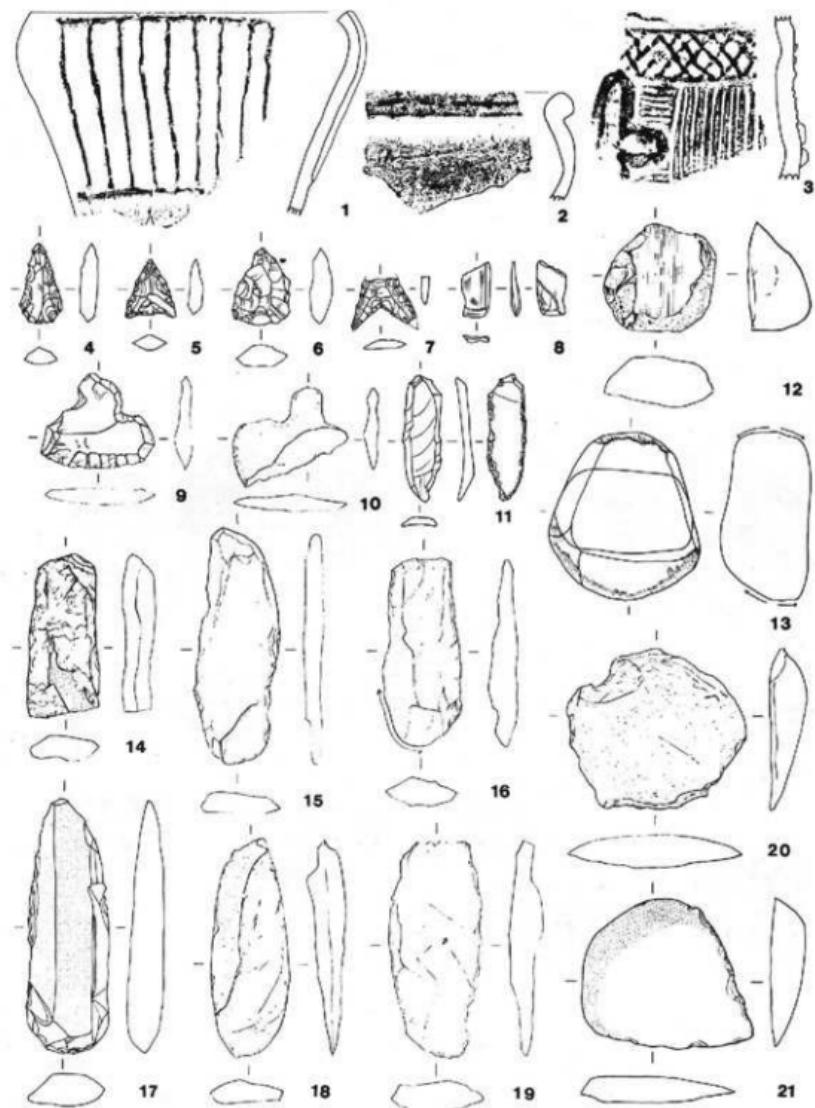
遺物は層位別に図示することが望ましいが、レイアウトの都合上層位を無視して図示したので、土器のみ層位を番号で示す。I層 砂混じり黄色土。調査時に存在した水田の造成時に尾根の高い地点から削り運んできた土で、無遺物層。II層 黒色土。第26図3。III層 黒褐色土。第24図1～5、9、第25図 1、3、7、9。第26図 1、2。IV層 黄褐色土。第24図6～8。第25図 2、4～6、8,11。



第24図 土器捨て場出土土器実測図 2～6,8,9 (1:3) 1,7 (1:6)



第25図 土器捨て場出土土器拓影 (1:3)



第26図 土器捨て場出土土器拓影及び石器実測図 1～3, 9, 10, 12～21 (1:3) 4～8, 11 (1:1.5)

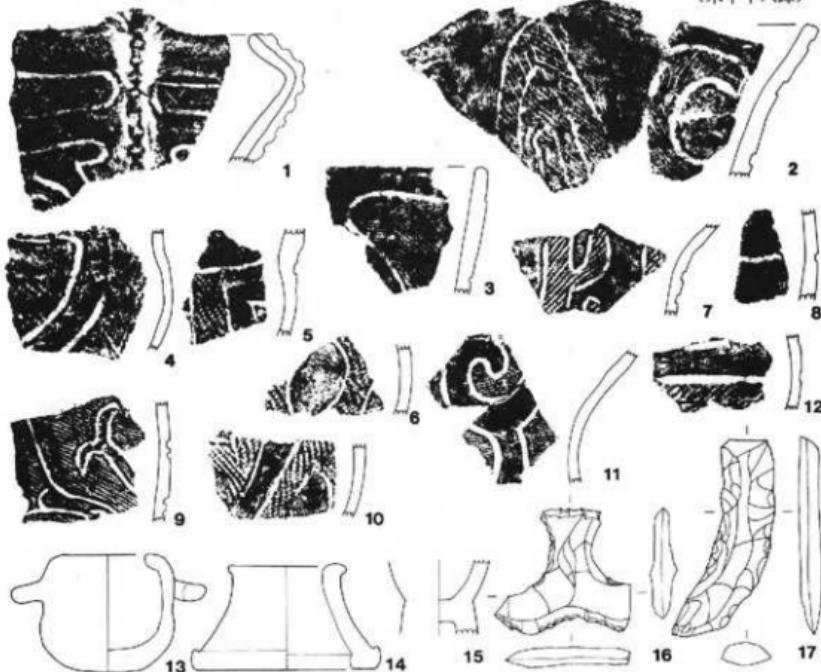
II層から出土した土器片は、曾利系の土器片が主体で、わずかに井戸尻期のものが混ざる。III、IV層に遺物が多く包含されており、井戸尻期に併行するもので、この時期の住居址の存在が考えられるが、今回の調査では検出することが出来なかった。古い時期の造成時に削り取られ、谷田川近くの低地に埋められ、度重なる災害で流失したと考えられる。

遺構外遺物 (第27図、表紙、図版9,12)

土器 第27図1~12 表採とグリッド掘りの時点で出土したものである。9以外は沈線の内と外を摩消す摩消繩文の一群で縄文後期初頭のものである。13 E 2-9 グリッドより出土したミニチュア土器で、口径2.1~2.6cm、高さ3cm肩部に双耳が付き耳の付根に3mmの穴があく。14 壺型土器の口縁部の折れたものの切断面を擦っている。切断面付近に斜めの沈線が引かれている。15 E 2-10グリッドの第3号住居址覆土上層出土で、台付ミニチュア土器の胴のくびれた部分である。

石器 16 赤色チャートの石匕で、刃部中央にえぐりが入れてあり先端部が欠損している。17 基部が欠けており、外側に刃部を作り出して使用したもの。サヌカイト状の石質である。

(木下平八郎)



第27図 遺構外出土土器拓影及び石器実測図

1~12 (1:3) 13,14,16,17 (1:1.5) 15 (1:1)

第IV章 '美里の歴史的歩み

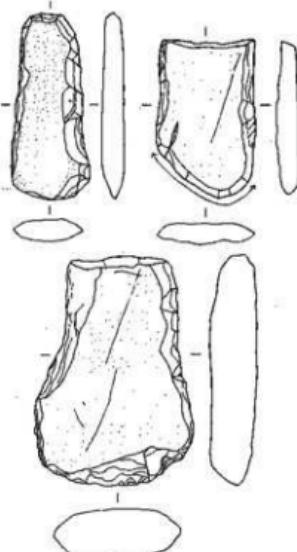
1 美里地区の原始・古代

美里地区の原始時代を述べるにあたり、中川村のこの時代の概略を記してみると、中川村では片桐地区に縄文草創期の表裏縄文の原田遺跡(前9,400年±40)と推定される遺跡が発見されているところから、中川村ではもう既に草創期の時代に人々が居住していたことを証明してくれる。縄文時代早期になると、原田遺跡・大林遺跡など押型文土器を出土する遺跡が現わってくるが、中川村竜東の地区では今までにこの時代の遺跡は発見されていない。このことは、竜西の方では圃場整備などで調査が進められたので発見出来たが、竜東地区ではこうした行政上の埋蔵文化財の処理が適切でなかったこともあって発見されなかっただけで、今後この地区から発見されることは無いとする事はできない。今回の谷田遺跡からは縄文早期末の縦維土器ではないかと思われる土器片が出土しているが、小破片であるため定かではない。縄文前期では、片桐地区的刈谷原遺跡・茶堂遺跡・中村遺跡など縄文前期初頭の遺跡は発見されているが、竜東地区では発見されていない。このことも前述早期のところで述べた条件と同様と考えてよい。縄文前期末の時期になると、諸職式土器が大草冲田太子原や、間柱下の原などから発見されているので、縄文前期末には竜東地区に遺跡は分布するようになる。

縄文中期になると遺跡は飛躍的に増加し、この時期には、中部地方が日本の中でも最も生活文化が繁栄する。中川村でも26箇所に達し、溝林遺跡・上ノ原遺跡・沖田太子原遺跡などの大遺跡が成立するようになる。今回発掘された谷田遺跡では、中期でも古い方は発見されず、中期中葉井戸尻期以前の土器は無さそうである。谷田遺跡にあっては中期後葉曾利系の遺物が主体となった。この時期にあっては、町・沖田太子原・池の平・中ノ平姫宮・大草蛇石・下平・堂ヶ原・城山・北組箕輪田・間柱下の原・中林集会所付近・北組松下氏宅地・米沢氏宅・北の原・中林平・柳沢山郷・葛島のハツ手・葛北・曲田等から出土している。美里地区には、この時期に普及したものと思われる。

今回新しく発見された西丸尾遺跡(発見者 横前秀幸氏 S61.5)は縄文中期後葉と考えられる。(第28図) 今まで西丸尾地区には縄文中期頃の遺跡は存在しないだろうと考えられていたのであるが、丸尾地区も谷田地区と同じ時期の遺跡が分布していることが今回の調査で確認出来た。このことは今回の調査の大きな収穫の一つであった。

縄文後期、この時期になると長野県の中央高地一帯は遺跡の数が急激に減少する。中期の盛んな繁栄ぶりに比較して、これはいったいどうしたことであろうか。この反面、東海や南関東の海岸地帯に



第28図 西丸尾地区出土石器(1:3)

は後晩期の遺跡が多く存在する。このことは寒冷な気候に襲われたのか、黒潮の影響で食糧の豊かな温暖の地に移動したのであろうか、特に伊那谷には後晩期の遺跡は中期に比べ10%にも満たない状態である。

こうした中にあって昭和41年2月水道工事中に、前南向小学校（現望岳荘）の北側道路敷の下から、後期初頭頃名寺貝塚第2群土器

に類似した土器が出土した。また、北組北の原からも同類の土器が出土している。（図版13）このことは先に述べた移動の問題で気候が関係しているとしたら、中川村は上伊那地方の中では暖かい所があるので、あるいは移動が少なく後期人々が留まることができたのかも知れない。

とにかく、中川村の遺跡から後期の土器が多く出土するという事実は、注目すべきことである。谷田遺跡から後期の構造が確認されたことにより、後期が抱えている諸問題を論じる上で貴重な資料であると考えられる。

2 弥生時代の美里

縄文時代が終わるころ、ここ天竜川沿岸の地域では、東北系の土器文化と東海系の土器文化が接触する状態が現れてくる。こうした時期が過ぎる頃、天竜川を遡って東海地方から全く新しい文化が流入してくる。これが弥生文化である。弥生文化と縄文文化の違いは、土器を見ただけでも差異がわかるが、それよりもっと基本的なところは、食糧を自ら生産し生活の安定を獲得するという、計画的、自立的な生産方法を持つようになった点である。この弥生文化は今から2,300年ほど前に北九州に上陸し、その後当時の気候に左右されながら急速な勢いで瀬戸内、近畿を経て濃尾平野の浜松敦賀の線まで到來する。しかし、この線より北は広葉樹



第29図 西丸尾地区遠景



第30図 丸尾地区遠景

林にかかるわる禪文晩期の文化圏が確立されており、この文化圏を簡単に突破するに至らず、一時停滞せざるを得なかった。また、この時期は弥生時代のうち、前期の終わり頃に当たっていた。こうした停滞時期を経て東海地方から伊那谷に波及してきたのである。

その足跡を最初にとどめたのが、かの有名な中川村横前刈谷原遺跡である。弥生時代の文化が伊那谷に到來したのは、日本にそれが入ってきてからわずか100年ほど後のことである。実際に中川村で米作りができる村が成立するのは弥生時代でも後期、2000年を降る時期になってからである。この間の弥生時代中期の遺跡が中川村では発見されていないが、この時期には下伊那では河野、北原遺跡が存在しているので、中川村でもこの時期の遺跡があつても不思議ではないが、今までの調査では片桐の中川村遺跡で3片ほどの、弥生中期の亜流と思われる土器が発見されているに過ぎない。あるいは他に遺跡が存在する可能性もあり得る。

次の弥生時代後期になると中川村全体から発見され、そのうち大型の遺跡は小和田山田、中村、田島などであるが、やや小規模の遺跡は天竜川の左右岸の段丘上に分布している。その他伊那山脈から流れ出る小河川の沢沿いを利用した遺跡も見受けられる。竜東地区で今までに知られている遺跡は美

里谷田、下り松、中組A、
中組北原、堂が原、川荒田、
中島、下平F、太子原、中
林、間柱、下ヶ原、葛島城、
天伯、双葉園、姫宮、ハツ
手、小町原、下島遺跡等18
遺跡が確認されたが、まだ
他の地域にも埋もれている
遺跡があるかも知れない。
美里には今のところ谷田遺
跡のみであるが、丸尾、西
丸尾の地域も谷田遺跡と類
似している地形もあるの
で、弥生時代の遺跡が無い



第31図 谷田地区遠景

ともいえない。今後もっと注意して見てきたいものである。谷田遺跡には古い水田が存在したこと
は確かであろうが、その痕跡をつきとめることができなかった。しかしながら、美里の地区には弥生
時代後期の村が成立していたことと考えられる。

3 古墳時代の美里

南向村誌に谷田遺跡から《須恵器》が出土したと記してある。今回南在家の発見は初見とはならなかつたが、それを裏付けする資料として貴重な発見となつた。こうした発見が重なることによって美里地区には大草地区の中組、下平の諸遺跡が成立した古墳時代後期の頃には古墳文化が入ったことを
知ることができる。どれだけの村があり、どんな文化があったのか、これだけの資料からは当時の文化を復元することはできないので、今後資料の増加をみて美里の古墳文化の在り方をまとめたいもの

である。

4 奈良時代の美里

古墳時代の美里については難解な問題であったが、奈良時代は更に問題が大きい。これは《須恵器》と《土師器》の分類の問題がある。一般的には須恵器は古墳時代として片付けがちであるが、須恵器は5世紀から灰釉陶器の出土する時代までの間使用されていたので、この間の須恵器を分類すれば各時代を知ることができる。今後の研究はこうした分類を試み、美里の文化の位置を段階的に処理することも可能であると考えている。また、奈良時代は律令制度が施行されていた時代で、公地公民制を基礎とする中央集権の国家体制である。広義では大化改新から平安時代までこの制度が行われた。中央組織の官位制定がなされ、官位に応じて職田、位田、封戸、位禄、季禄が支給され、課役が免除された。土地制度は全国の田地を公地、宅地私地、山川やぶ沢を公私共利の地とし、田地は班田収授法により6歳以上の男女に班給した。また、それに相当した身分制も定められた。国家の財政的基礎は租・庸・調と雜で、租はすべて口分田に課す土地税であり、主として地方国費にあてた。庸、調は、公民の中の中男・正丁・次丁に課する人頭税で、すべて中央の費用にあて、雜は中男、正丁、次丁に課し、地方の公役にあてた。軍制は各地に軍團を置き、正丁の三分の一を徴発した。以上が律令制度のあらましである。

この時代の美里は確かに人々が居住していたことを知ることができたが、その規模や範囲をつきとめることができなかったので、当時の常民の地域でのあり方というところまで追求するには至らなかった。

奈良時代の問題は文献が乏しいため、現地の考古学的研究に頼るところが多い。今回の調査ではこれららの問題に触れる一部の資料しか得られなかつたことは残念だった。しかし、美里の奈良時代の研究の糸口をつかめ得たことは大変な収穫であると思う。

5 美里の平安時代

奈良時代の末期における政局に対する時代的反省は、光仁天皇の即位と共にすでに発現の気運に際会していた。天応元年、桓武天皇の即位とともにその実が挙げられ、従来の政局から完全に脱却するため都を平城から平安の地に遷した。それから明治維新に至る約1,100年の間、都は平安京に置かれた。そのうち源頼朝が鎌倉に幕府を開くまでの400年間を平安時代と呼んでいる。この平安時代は奈良時代に制定された律令国家の刷新が行われた時代でもある。また、坂上田村麻呂の伊那郡通過記録、伝教大師の東国巡録の記録などがあり、伊那の状態を知ることができます。また、社会及び経済生活の変化により、班田制度は郡県制による中央集権の基礎を固くするものであったが、これの実施中、種々の問題が生じ、延喜年間を境にしてこの制度は崩壊するに至った。これら制度の崩壊は土地墾田私有の公認に伴うものであって、このための公有地に対



第32図 田ノ頭地籍



第33図 黒牛地区遠景

して私有地が生まれることとなった。これが社寺領門勢家私有地として荘園制の発達をみるに至ったのである。こうした社会にあって国衛領と荘園領主との間にいろいろな問題が発生するようになった。このような平安時代の中の美里はどうであったか、今回の調査で知りえた二、三の問題点と対比してみたいと思う。

(一) 美里での平安時代遺跡の発見

谷田遺跡の発掘中に暇をみて遺跡周辺の分布調査を行ったところ、谷田遺

跡に近接している南在家桃沢先生宅東の栗園から、平安時代後半に焼かれた灰釉陶器の破片を発見することができた。この灰釉陶器の発見により、平安時代にこの地に人々が住んでいたことが証明された。平安の村があったことも確かめられた。また、発見地が南在家という平安時代の地名でもあることから、平安時代の美里の歴史を語るうえで重要な資料となった。また、もうひとつの発見は、これも調査員の木下平八郎、国学院大学生下平博行尚氏が、田ノ頭（第32図）の入口附近の畠から、南在家の畠から発見されたものと同じ灰釉陶器や奈良時代末期から平安時代の須恵器片を表採した。このことからもこの附近に平安時代の村々が存在していたことをつきとめることができた。その後、黒牛方面にも調査を広げてき、縄文中期頃は黒牛までは谷田遺跡の範囲ではなかっただろうか。弥生時代については今のところ明らかではない。奈良時代頃から黒牛地区（第33図）には生活の場が広がり、平安時代に至ってこの地を支配する層の定着があり、南在家の成立をみたものと思われる。（在家とはもと住屋の意。中世の国衛・荘園で住屋とその付属の園、宅地を含めた収取単位で、在家役賦課の対象となった農民。その存在形態は時代や地方によって異なり多様である。この律令制の租・庸・調を中心とした個人身の支配体系が崩壊したのち、課税は次第に田地中心の反別賦課に移行したが、公事・夫役は田地を経営する農民の家別（農家別）賦課に移った。また田地を経営しない田屋・港津なども在家単位の公事・夫役賦課が行われていたようである。）

例一 伊那郡宮田郷（上伊那郡宮田村）を参考にしてみると、平安時代の後期には中世につながる郷、保、村などの所領の単位が生まれ、公領かまたは荘園のどちらかに所属していたと思う。特に公領は律令制下の国、郡、郷の制度とは変わっていた。中世社会の骨格として重要な役割を果たしていた。伊那郡宮田郷は平安後期に宮田村とも呼ばれ、国の政府の支配下に置かれた公領だった。保延2年（1136年）宮田村の司であった平家基は、信濃国守藤原親隆に宛て、神事、勅事（朝廷の賦課する臨時の役）、京上人夫など諸役を免除するように申請した。この上申文書によれば、この村は前から國の政府の御布所によって万難公事が免除されていた。そのかわりに公田1町歩当たり細布2段（反）、在家一宇あたり中布一段を納入してきた。当時宮田村の公田は18町余、在家は20余字で、その所當物（租税）を一段の未進も

なく納入してきた。ところが、国の政府の在官人らはその先例を無視して、神事以下の雜役を賦課し、その納入を強要してきた。このため住人らは飢餓や疫病の流行も重なって逃亡したり死亡する者が多く、公田の耕作もできないので、国守の裁量によってこれらの雜役が免除されるならば、荒野を開拓して所當官物を納入するようにしたい、と主張したのである。

(「平安遺文」(5)1985)

これらの平安遺文の内容から平安時代後期の「在家」の抱えている諸問題の一端を伺うことができる。中川村に現在、南在家しか地名として残っていないが、村内には南在家だけでなく、他にも在家は存在していたのではないだろうか。こうした例から当時の村々多くの問題を抱えていたことが想像される。今回はスペースの都合により平安時代でとめておきたい。

6 美里の古地名

美里には天正19年の丸尾村谷田村の御検地帳（第34、38図）が保存されている。この検地帳に記されている数多くの地名は、おそらく谷田、丸尾の少なくとも平安時代までさかのばる歴史を物語っている。今日、中世の文書が数少ない中で、この検地帳は美里の中世史を物語る唯一の資料となっている。今後はこれらの検地帳に載っている地名を活用することによって、美里の今までわからなかった歴史を開いていくことができると信じている。



第34図 天正19年(1591年)の検地帳

7 美里の古い信仰

谷田の検地帳の中の「いへのうえどんげんはた」「神明のまえ」などの地名は、おそらく平安時代に觀現信仰が入って来たことを物語るものであろう。この觀現信仰は神仏混肴の信仰で、薬師觀音などが祀られたもので今に残る薬師様や觀音様信仰をたどれば、おそらく平安、鎌倉時代までの起源をたどることができると思う。美里には谷田神社、下谷田神社、黒牛神社、西丸尾神社などの神社が存在するが、これらの神社の起源は、氏を中心とした村の守



第35図 十王像

り神であったと思う。それが時代と共に今日のような神社の形態に変化したのではないだろうか。特に風三郎神社は古くは磐座(いわくら)であった(第36図)と解く人もいる。その後美女ヶ森社伝記に「大草里黒牛坐風神崇也此神実祭靈現告給是伝也。大草里長武彦岩勢吾道宮主牛足彦共議種々 物奉奉称言申給風和雨止穏也」とある。これらの伝記も「磐座」にまつわるものであろう。

◎寺院

美里に仏教が伝来した時期は不明である。谷田の妙福寺は今は廃寺となっており、わずかに朽ちた一小字がのこっていて、十王像(第35図)がわびしく影をひそめている。その傍らに寛政五年癸丑十月初二日、中興権大僧都法印智超覚位の石碑が草むらの中にたたずんでいる。この僧都は中興の開山と思われるので、この妙福寺の開山はもっと古い時期であることがわかる。本尊に薬師如来、不動明王



第36図 風三郎神社奥宮

など祀られているあたり、天台宗の寺であろう。南向村誌によると大島山瑠璃寺を本寺としていたようであるが、妙福寺以前は、薬師堂などが古くからあり、薬師信仰がこの地にも存在していたことをうかがわせる。また、丸尾には「てうふつかい」という仏教に関係した地名も残っており、近くには堂があったとも言われている。美里の古い時期にはこうした古い堂があり、古代信仰がいきづいていたのであろう。

9 天正19年の御検地帳の地名(第38図)と、明治の土地台帳の地名(第37図)と地図(第39,40図)を掲げ、美里の歴史的環境の参考としたい。

調査団長 友野良一

(西丸尾地区) (第39図 A)

1 才 / 神	2 宮 沢	3 道 端	4 桶 尻	5 日 影 田	6 日 影	7 沢 / 田	8 森 下	9 沢 / 田
10 前 田	11 平 烟	12 屋 敷 添	13 下 垣 外	14 桶 烟	15 細 久 保	16 家 / 下	17 北垣外烟	18 沢 端
19 仲 屋	20 家 / 北	21 川 原 田	22 仲 屋	23 清 水 田	24 日 影 田	25 森 下	26 森 下	27 落 / 田
28 五十目田	29 十七 免	30 清 水 田	31 石 原 田	32 赤 板	33 沢 / 田	34 烟 尻	35 家 / 裏	36 石 原 烟
37 井 戸 上	38 萩 原	39 水 口	40 宮 / 前	41 萩 原	42 宮 / 前	43 後 沢	44 家 / 前	45 百合垣外
46 家 / 下	47 白 木	48 沢 入 口	49 深 山 口	50 四畠町田	51 晴 田	52 カジヤ烟	53 山 / 田	54 猪 田
55 日 影 田	56 山 / 田 烟	57 畦 田	58 畦 田 山	59 池 / 元	60 立 畦	61 立 畦 上 切	62 立 畦 下 切	63 畦 敷 田
64 前 田	65 前 田 下	66 藤 久 保	67 家 / 下	68 隆 居 田	69 久 保 田	70 久 保	71 家 / 上	72 発 興
73 発 興 的 根								

(九尾地区) (第39図 B)

1 鶴 料 田	2 宮 沢 日 影	3 五 升 莎	4 下 向 田	5 傍 示 前 田	6 上 向 田	7 向 林	8 里 道 田	9 梢 田
10 成 仏 外	11 下 前 田	12 上 前 田	13 丸 尾	14 横 道 烟	15 垣 外	16 千 在 田	17 五 十 目 田	18 下 基 戸 田
19 上 基 戸 田	20 年 / 神	21 宮 / 前	22 下 広 田	23 池 / 元	24 豊 口 田	25 豊 口 烟	26 小 垣 外	27 家 / 下 田
28 中 垣 外	29 沢 / 田	30 嵩 山 田	31 上 広 田	32 孫 八 田	33 中 田	34 町 張 田	35 上 沢 田	36 丸 山 田
37 強 水 田	38 細 久 保	39 ア レ 田	40 柳 久 保	41 松 葉 垣 外	42 長 久 保	43 鈎 峰 田		

(谷田地区) (第39図 C)

1 才 / 神	2 カ ツ シ ロ	3 神 田	4 畔 田	5 樽 田	6 曰 久 保	7 四 百 田	8 曰 久 保	9 曰 影
10 畠 田	11 鶴 稲 久 保	12 平 烟	13 畑 烟	14 垣 外	15 家 / 下	16 鶴 居 田	17 菅 田	18 長 通
19 久 保	20 桑 木 田	21 門 田	22 沢 田	23 石 原 田	24 稲 田	25 石 原 田	26 下 谷 田	27 村 田
28 畠 敷 田	29 道 上	30 畠 敷 下	31 畠	32 稲 場	33 家 / 下	34 中 谷 田	35 家 / 上	36 仲 谷 田 下 切
37 仲 谷 田 上	38 / 尾	39 弥 宜 畠	40 根 木 畠	41 根 木 田 屋	42 宮 / 前	43 宮	44 上 田	45 上 垣 外
46 浅 間	47 沢 田	48 車 屋 田	49 沢 田	50 新 井 田	51 五 六 樽	51 ニ ゴ 田	53 久 保 田	54 新 井 久 保 田
55 新 井	56 鈎 峰 田	57 新 井 田	58 樽 田	59 新 井 田 上	60 ニ ガ ハ ラ	60 仲 屋 敷	62 清 林 田	63 新 井 久 保 田
64 沢 入 田	65 右 岸 畠 敷	66 上 / 原	67 南	68 井 柄 屋	69 鎌 治 屋	69 仲 屋	71 出 口	72 沢 通 り
73 下 田	74 大 畠 町	75 中 / 田	76 前 田	77 ヨ セ 田	78 家 / 上	78 谷 田	80 ヨ セ 畑	81 畠 敷 上
82 古 畠 敷	83 裏 木 田	84 銭 通	85 菖 蒲 平	86 家 / 下	87 平 畑	87 菖 蒲 垣 外	89 菖 蒲 平	90 カ ニ 田
91 横 田	92 間 潤 口	93 ド ジ ヲ 畑	94 隆 居 田	95 久 保 田				

(黒牛地区) (第40図 D)

1 間 潤 口	2 沢 尻	3 間 垣 外	4 沼	5 大 沼	6 丸 山	7 山 / 神	8 田 / 頭	9 山 / 神
10 森 下	11 山 / 神	12 森 下 烟	13 南 在 家	14 日 影 上 烟	15 道 添 烟	16 日 影	17 日 影 畑	18 家 / 上
19 家 / 下	20 屋 敷 北 壱	21 内 垣 外	22 南 在 家	23 日 向 烟	24 粒 / 尻	25 沢	26 溝 下	27 元 尿 敷
28 西 / 久 保	29 西 / 久 保	30 宮 下	31 家 / 上	32 大 苗 代	33 畠 上	34 田 代 田	35 下 村	36 平 垣 外
37 垣 外 田	38 基 九 田	39 龍 / 久 保	40 砂 田	41 文 六	42 平 垣 外	43 前 田	44 垣 外	45 西
46 東 47 中	48 細 畑	49 芦 原	50 芦 原 田	51 山 畑	52 鳥 居 原	53 芦 原	54 大 ヒ ゲ	
55 大 荒	56 本 沢	57 ヒ ラ 岩	58 ヒ ラ 岩 烟	59 池 田	60 石 原 田	61 石 原 田 代 田	62 研	63 セ ラ 田
64 石 原 横 口	65 日 向 町 張	66 曲 り 田	67 ツ バ ナ 原	68 白 地 垣 外	69 平 垣 外	70 中 垣	71 紙 屋	72 垣 外 畑
73 下 垣 外 畑	74 乗 木 田	75 畠 敷	76 前 田	77 上 垣 外 畑	78 日 向	79 家 / 上	80 上 垣 外	81 横 田
82 南 田	83 ク ネ 下	84 尾 梨 畑						

第37図 明治時代の小字名

(谷田の郷)

田 方 (合拾壱町九段九畝式参坪 右分米九拾七石六斗三升六タ)

日かけ田	こうかく田	あせ田	とうかく	あり田	日かけ田	あらひまちはり	日かけ田
阿せ田	ひやく田	井 田	ま と	沢ノ田	沢田かす田	岩原田	さんし田
ひへ田	竹のこし	ひへ田	蘿藏かいと	あせ田	すな田	よこ田	沢 田
かに田	蘿藏かいと	ひへ田	木 下	かに田	中そり田	石 田	ませ田
ひかけ田	さわの田	沢 田	三な三田	三やのまへ	かちかいと	いし原	秀次郎田
平かいと	阿まつ三	平かひと	かめくぼ	てうろく	竹のこし	にし田	三そ下
かと田	ませ口田	すな田	かに田	ひかけ田	沢 田	山ノ田	阿らいはた
にかき田	すく田	上ノ原	日かけ田	沢 田	日かけ田	ひなた	沢 田
ひなた	三やの田	沢 田	北 田	おさき田	たな田	いい田	はやしのこし
こかいと	井 口	雍 田	日かけ田	つる弥田	日かけ田	井領田	荒 田
きやうらくば	藤 助 田	沢 田	三やまた	よきとき	まくそと	日かけ三また	上 田
志のいと	柿ノ木田	かに田	沢 田				

島(烟)方(合五町九段九畝拾壱坪 右分米或拾七石九斗八升八合武タ)

沢はた	沢いり	切 山	にしほた	ほかけ田	日かけ田	切 山	日かけ
下かいと	平はた	なきはた	三弥のはた	なきはた	沢はた	丸 山	阿かはた
石はた	川はた	石阿ら	蘿藏かいと	沢はた	石阿らはた	石阿らはた	平はた
古せはた	うへ原	日かけ	にしほた	石阿らい	ひなた	かいと	いへの上
竹阿ら	ほッ田	阿かはた	坂志り	いへの下	年貢烟	田くろ	どんげんはた
三やまはた	阿らはた	ひへはた	平	石 原	なきはた	竹のこし	きやらくばら
							神明まへ

屋敷方 21軒 (四段六畝 右之分米五石五斗武升)

(丸尾之郷)

田 方 (合六町式反式九畝拾四坪半 右之分米四拾六石武斗五升毫合三タ)

とち山	前 田	もりの下	竹のこし	たな田	つる弥田	おのくば	さいのかた
日かけ	沢 田	ほそ田	石原田	沢 田	おちの田	あせ田	清水田
沢入口	山 田	つふの志り	日かけ	一升たけ	ふしまへ	むかい田	志ものむかい田
かと田	まとは口	宮ノ前	下ひろ	ほそ田	いけの本	三そしろ	志もひろ
とい口	かめくは	丸 山	山きわ	東亀くは	三弥田	か三田	三弥の田
ませ田	沢 田	神 田	まちはり				

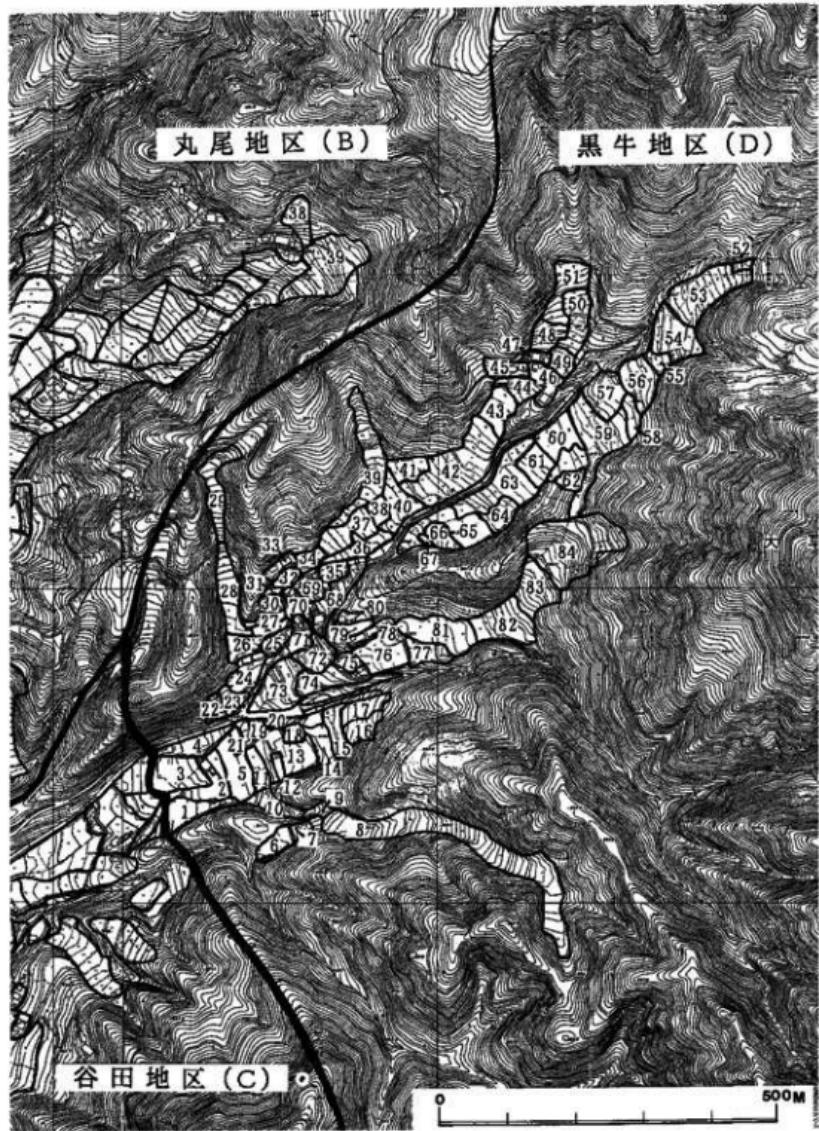
島(烟)方(合三町九段七畝式八坪 右之分米拾九石武斗五升五合)

おけ志り	おこすはた	平 煙	ひ ら	なきはた	沢はた	日かけ	ひらはた
そりはた	石原畑	いりのたい	田志ろ	むかいはた	家ノまへ	下むかいはた	ひかけ
三そ志ろ	日かけ	平はた	切 山	すなはた	切 山	石はた	中山
日かけ	ふる三や	おきくは	やなきくは	大ひろ	なかひろ	いわつかはた	中ひろ
宮ノうしろ	山はた	西丸尾はた					

屋敷方 10軒 (合合反九畝拾六坪 右之米式石三斗四升四合)



第39図 美里地区小字図（その1）



第40図 美里地区小字図（その2）

所 見

今回の調査において得られた多くの成果は予想以上のものがあったと思うが、ここではそのうち主とされるいくつかについて述べ所見としたい。

1. 本遺跡の自然的環境については、地形・地質の項で述べたが、特に美里地区においては、陳馬形断層の崖堆植物の上に作られている関係から、縄文時代前から幾度か洪水に見まわれたため、美里地区の各所には古い崩落や侵食が見受けられるところから容易に知ることができる。その後幾度か洪水に会い、遺跡の一部が削り取られた所も見受けられる。また、弥生時代・古墳時代にも小さな洪水が幾度か繰返されたようである。縄文時代中期以後平安時代前期頃までは、割合に安定していたとみえる。このことは、中川村にあっては、片桐の中村遺跡においても縄文時代早期～平安時代前期頃までの村が残っていたことでも知ることができる。最近調査した例としては、宮田村大田切川の中にも縄文時代中期・弥生時代・平安時代の遺跡が発見された。駒ヶ根市上赤須の中通り遺跡でもそうした例があるところから、この地方に於いては、縄文時代早期頃から平安時代前期頃まではそうした村々が消滅するほどの大洪水はなかったようである。美里の谷田もこの地方の遺跡と同じように生活の舞台として存続したのであろう。
2. この谷田遺跡における集落全体のあり方については大変に残念なことではあるが、調査範囲が小範囲であったためと、幾度かの改良事業工事が重なり遺跡の破壊が繰返された状態のため、集落としての復原にはいささか問題が多い遺跡となった。そのことは、谷田川を隔てて南側にも本遺跡と同様の遺跡が広がっていることが確認されたことにより、今回調査された遺跡はもっと広い範囲としてとらえた方が妥当ではないかと思われる。また、北限は現存のところ南在家より北黒牛地区には遺物が発見されなかったが、絶対無しというのではないので、今後の研究に待ちたい。
3. 南在家の調査。今回の調査で特に注目したいのは「南在家」と言う地名である。「在家」という地名は平安時代の文献によく出てくる地名であることである。おそらく、黒牛に村の司の拠点があり、それに対して南に在家を設けたので「南在家」としたのではないかと推測される。在家はおそらく在家役を勤めていたと考えられるので、この地が当時國からの賦課の対象となっていたものと考えられる。このことは、当代の國の政治のあり方を知るうえで重要な資料となると思われる。以上のことから地名の上ののみでなく、実質的に平安時代の遺物が発見されれば、このうえもないことだと考え、地主の桃沢さんを煩わし在家とされている地域を調査したところ、念願とする灰釉陶器を発見することができ、南在家が名実共に平安時代に存在した村であることを立証することができた。
4. 田ノ頭。この「田ノ頭」は沢に添って作られた「山ノ田」である。この「山の田」がいったい何時頃作られたのか、これは大変興味深い問題の一つである。「田ノ頭」の成立した年代は明かでないが、この「田ノ頭」の入口付近から今回の調査の調査委員である木下平八郎と下平博行（国学院大学生）が、奈良時代末～平安時代にかけての須恵器と灰釉の陶器を発見した。このことは、この「田ノ頭」入口付近が奈良時代末から平安時代の村が確実に存在したことを物語るものとして、今回の調査の大きな収穫であった。今後「田ノ頭」と「山の田」の成立の研究上貴重な発見となつた。
5. 木地師の墓碑と言われている碑の調査。桃沢正哉氏に案内をお願いし現地調査となつた。「田ノ

頭」の入口より約500mほど沢について登った所の山道端に、花崗岩で作られた高さ70cmほどの石碑が草むらの中にひっそり立っている。木地屋の往時の面影をしのぶことができる環境である。碑に刻まれた文字が摩滅して読みとれないので橋沢定子さんに拓本を打ってもらったが、ついに読みとることができなかつた。石碑の形態から江戸時代中頃以前のものらしい。

6. 黒牛の風三郎。調査中に一度訪れたいと思っていたがついに訪れる機会がなかつたが、調査員の木下平八郎氏と下平博行(国学院大学生)が下調査をしてくれた。この調査で、風三郎は風穴であることと、それに磐座的な遺構で風に対する信仰の神としてとらえることができるのではないかと考えた。

7. 西丸尾の縄文時代。今回の調査で注目していた一つに西丸尾地区に遺跡が皆無であると言うことになっているが、果たして遺跡が無いかどうか確めてみたいと思っていたので、石原次長に案内をお願いしたところ、石原次長と宮崎村長さんのお宅の中間ぐらいの所に画家の横前秀幸さんの住宅がある。この横前さんが一昨年畑から石器を掘り出したという話を聞いたので次長とお訪ねした。石器は打製石斧(第28図)が主であったが、石器の形態から谷田遺跡と同時代の縄文中期であることがわかつた。この西丸尾も谷田と同じ縄文中期の村が存在していたことを確認することができた。また丸尾も西丸尾と同じ地形的条件を備えているところより、縄文時代より開けた村であると推測される。

8. 谷田遺跡と宮崎治示さん。谷田遺跡の調査に当つて谷田付近の考古資料を多く採集されておられたことは、私共の今回の谷田遺跡の発掘に大変に参考になった。

9. 谷田遺跡の直接の資料を所蔵されている白沢文雄さん。今回の調査では今まで谷田遺跡発見の多くの土器・石器を保存されていて我々に提供してくれたことは、今回の発掘に大きな参考となつた。

10. 地名の調査。中世の美里の研究に欠かせないのは地名である。幸いなことに丸尾に宮澤幹さんという旧家があり、古い検地帳を所蔵されておられるという話をお聞きしたので石原次長を煩わし、この検地帳を利用させていただくことができた。この検地帳の地名より美里地区の古代～中世の歴史を探ることのできる好資料となったことは幸いなことであった。おかげで今回の報告書の資料の中に地名一覧を加えることができた。後世美里の歴史の研究に役立たせていただければ幸である。

11. 出土遺物から見た谷田遺跡。今回の調査で、谷田遺跡は縄文中期の井戸尻期が上限で曾利Ⅰ式～Ⅳ式に至るまでと、縄文後期掘之内期が主体の遺跡であることが確認された。そのほか、小破片であったので明かでないが縄文前期らしき土器も検出され、また、弥生後期の遺物も発見された。

今回の調査で美里の方々の心からの御支援誠にありがとうございました。厚くお礼を申し上げます。

調査団長　友野良一

文献目録

- 日本考古学協会編「日本考古学辞典」東京堂 昭37
甲野 勇・江坂輝弥・山内清男編 「日本原始美術Ⅱ」 講談社 昭39
山内清男編 「日本原始美術Ⅰ」 講談社 昭39
大場磐雄 「神道考古学について」 (平出考古博物館) 昭41
鳥居龍藏 「先史及原始時代の上伊那」 信濃教育会上伊那部会 大正15
小林達雄 「縄文時代の集落」 国史学 昭55
森本六衛・小林行雄 「弥生式土器集成図録」 東京堂 昭13
小松行雄・杉原莊介編「弥生式土器集成」(本編) 昭39
友野良一「駒ヶ根市東伊那狐ヶ原遺跡調査概報」(伊那路) 昭39
座光寺考古学会 「飯田市座光寺中島遺跡の調査報告」(伊那) 昭51
宮沢恒之 「伊那谷における弥生集落の展開—座光寺原期を中心として」(中部高地の考古学) 昭53
宮田村教育委員会 「駒ヶ原南」 昭53
駒ヶ根市教育委員会 「荒神沢遺跡—緊急発掘調査報告書」 昭54
姫宮遺跡調査団 「姫宮遺跡」 昭49
中川村教育委員会 「西ケ原—中川村西ケ原遺跡緊急発掘調査報告書」 昭54
中川村教育委員会 「溝林遺跡」 昭55
中川村教育委員会 「原田遺跡」 昭56
日本考古学協会 「日本考古学辞典」 昭57
河出書房 「日本の考古学Ⅱ」 昭41
有斐閣 「日本考古学を学ぶⅠ」 昭53
南向村誌編纂委員会 「南向村誌」 中川東公民館 昭41
片桐公民館 「片桐村誌」 昭41
中川村教育委員会 「茶堂遺跡」 昭60
中川村教育委員会 「中村遺跡」 昭62
駒ヶ根市教育委員会・駒ヶ根市土地開発公社 「辻沢南遺跡」 昭63

図 版



谷田遺跡（西南より）

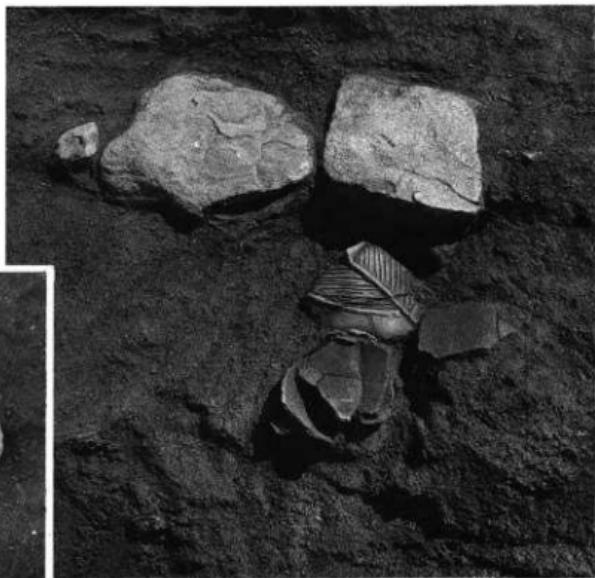


谷田遺跡（北より）

図版 2



第1号住居址



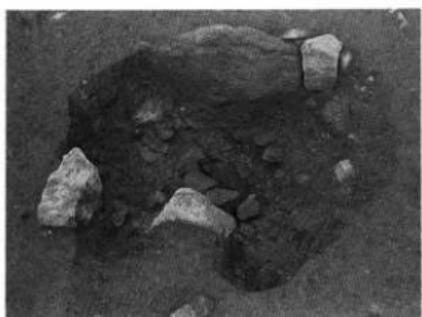
炉内 土器底部

炉 址

図版 3



第 2 号住居址



炉 址



P - 3

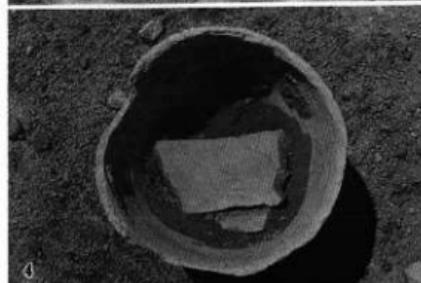


磨製石斧出土状況



投込み礫出土状況

図版 4



1～3 第2号住居址埋甕出土状況

4.5 埋甕内の土器片

5 (1:3)



6 (1:3)



7 (1:1)



6 埋甕

7.8 土偶

図版 5



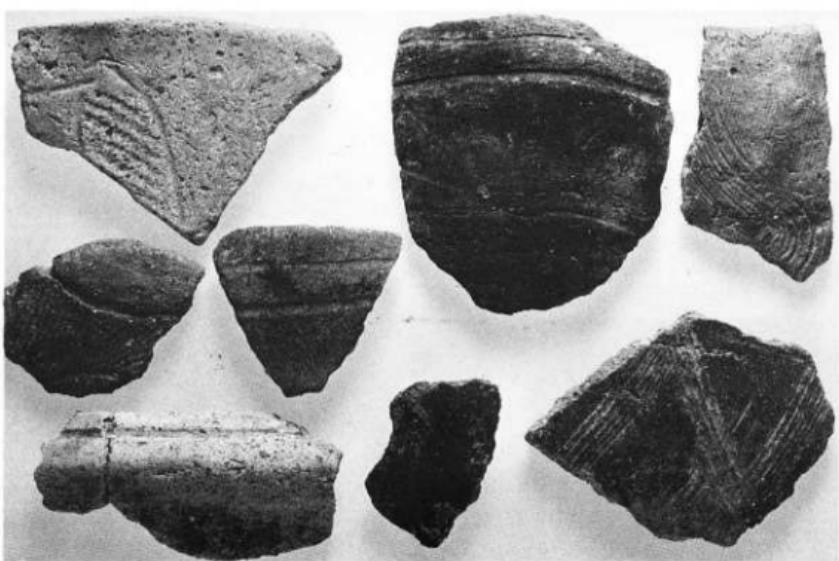
第 3 号住居址



敷石造構

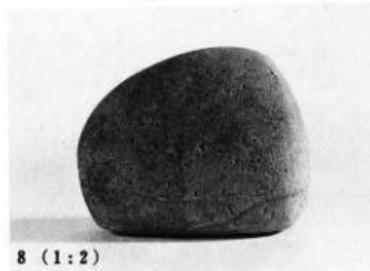
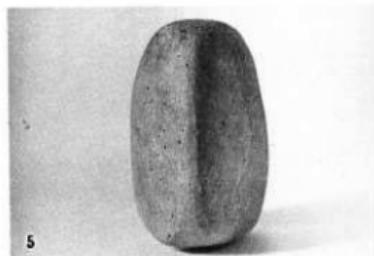
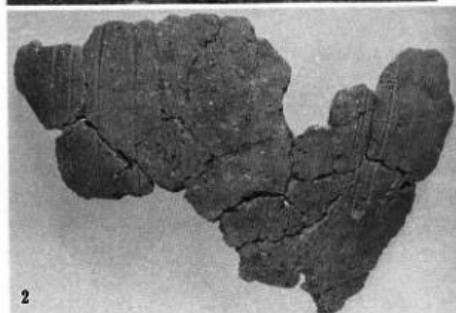


第 4 号住居址



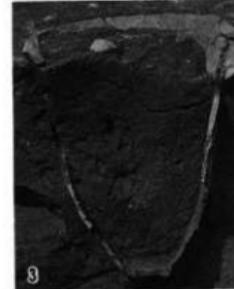
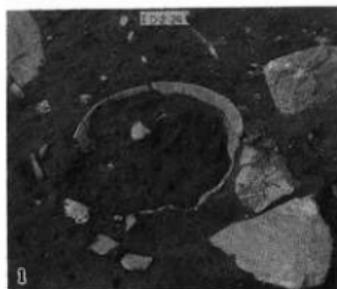
第 4 号住居址出土绳文後期土器 (1 : 1.5)

图版 7



1~3 第4号住居址 炉，炉内出土土器
4~8 第4号住居址出土遗物

図版 8



6

1 ~ 4 第1号土坑・出土埋甕

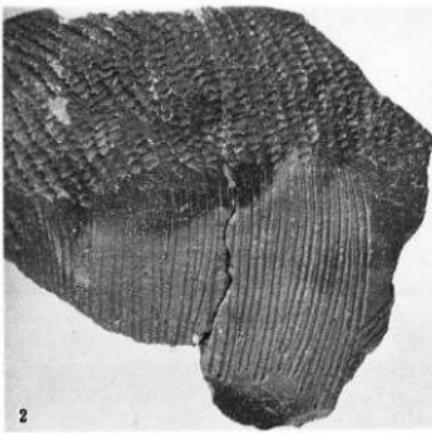
5 ~ 7 第2号土坑・出土埋甕

7

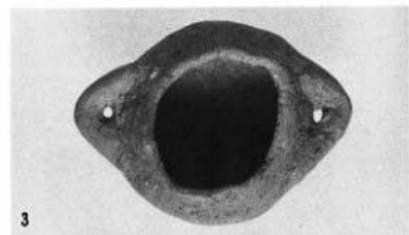
圖版 9



1



2



3



4



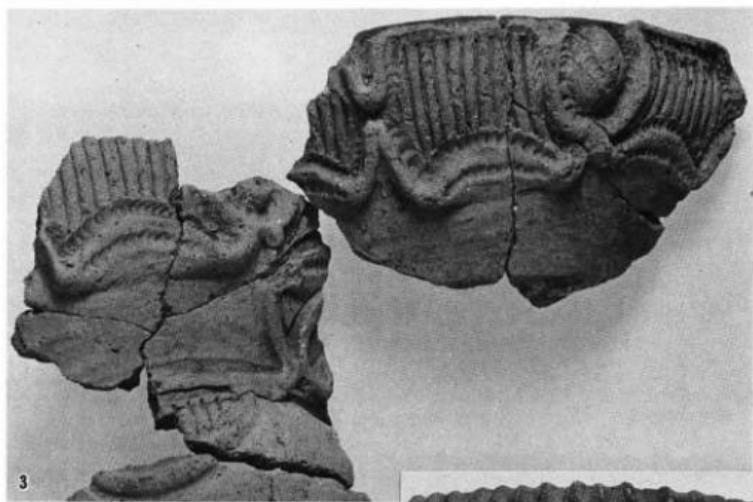
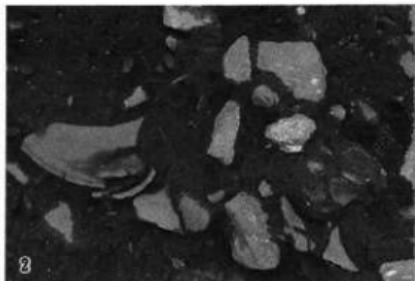
5



6

1, 2 第3号土坑

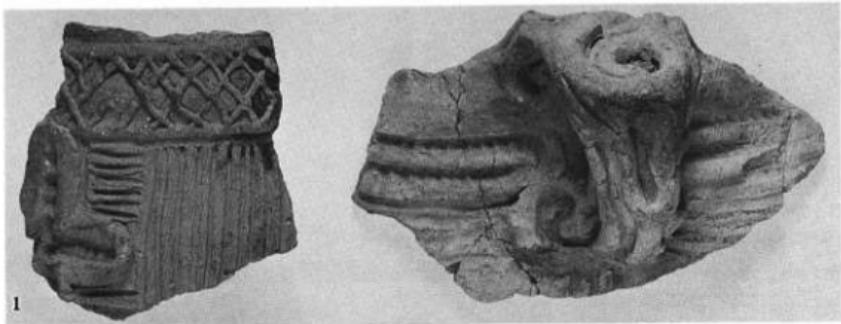
3~7 遺構外出土土器



1.2 土器捨て場出土状況

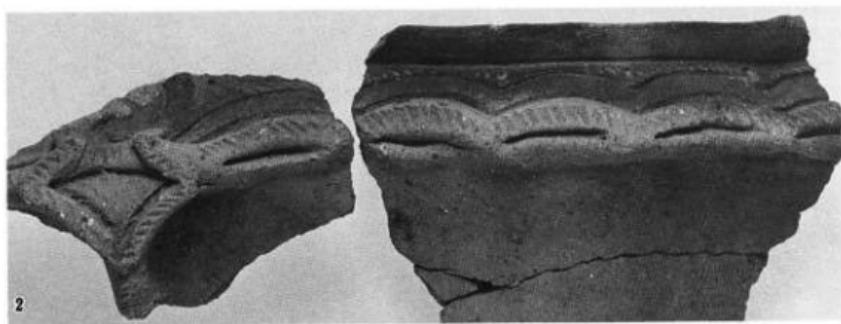
3～5 土器捨て場出土土器

図版11



縄文中期後葉

土器捨て場出土土器



縄文中期中葉

土器捨て場出土土器

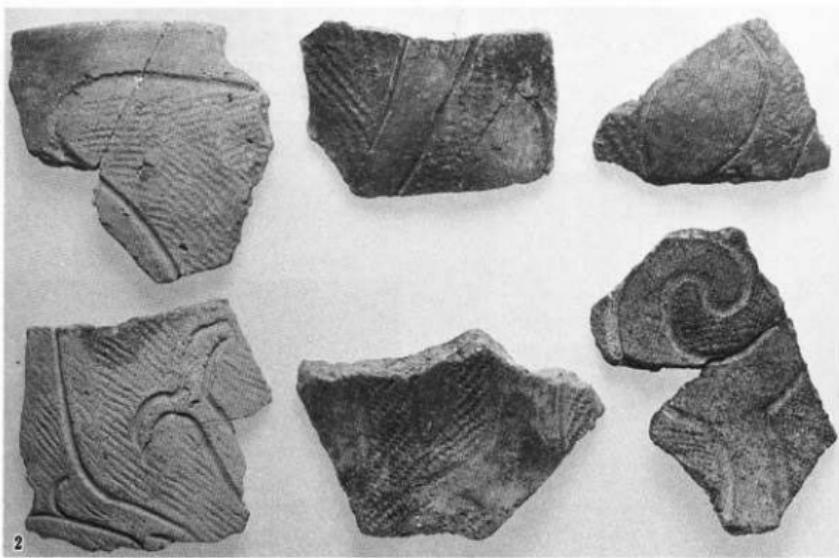


3.4 土器捨て場出土状況





1 (1:1.5)



2 (1:1.5)



3



4

1.2 條文後期 グリッド出土
3.4 谷田各地出土



参考

縄文後期

中組北原出土 (1:4)



参考

縄文後期

中組北原出土 (1:4)



参考

縄文後期 把手

中組北原出土